
BLAZBLUE World Travelers

タック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L A Z B L U E W o r l d T r a v e l e r s

【Nコード】

N 3 9 6 3 V

【作者名】

タック

【あらすじ】

ある日、カグツチから他の世界へ飛ばされた死神…ラグナⅡザⅡブラッドエッジ。

全世界の消滅をたくらむ巨悪を倒すため、ラグナは数々の世界を旅することになる。

プロローグ

ここは第十三階層都市「カグツチ」。その、だれも訪れることが無いであろう奥地にて、数人の男女がそこにいた。

「今、コンティニウムシフアーケンシャルフェノメシフト確率事象は確立事象へ移行した…」

高貴な服装に身を包んだ少女、否、帝が意味深な台詞を発した。

「シーケンシャルフェノメノン確立事象……だと……？それは一体どういう事だ、サヤ！」

突然のことで話が飲み込めず、大剣を背負い、赤いジャケットに身を纏う銀髪で赤と緑のオッドアイの青年……ラグナ・ザ・ブラッドエッジは帝……サヤに質問する。だが、答えたのはその隣、緑髪で他人に蛇を連想させるスーツ姿の男……ハザマだった。

「やれやれ……ま、ようするに私がタカマガハラを消去してパラルワールドを全部消滅させ、物語の道筋が一つになった、こんな所でしょうか？」

「そう、そして……滅日ほろびから逃れる術は、最早無い。」

ハザマの説明に相槌を打つかのように、サヤが滅日ほろびから逃れられないことを説明した。

「まるで僕達がお前の手の内で踊っていたと言いたそうな物言いだな。」

「貴様達の横暴、許すわけにはいかぬ！」

日本刀型のアークエネミーをその手に構えた金髪の青年：ジン「キサラギともう一人、かつて『黒き獣』を倒した六英雄のリーダー：ハクメンが戦闘態勢に入る。」

「やめておけ、そなたらでは勝負にもならぬ。」

しかし、サヤは全く動じることも無く勝負にならないと言いきった。それを聞いて、ラグナはショックを隠せないでいた。

「クソ・・・結局俺達はテメーらに屈するしかねーのかよ！俺は片腕失ったってのに・・・」

「ラグナさん・・・」

金髪の少女：ノエル「ヴァーミリオンはラグナに申し訳なさそうにつぶやく。自分のために片腕を失った男のために何もできない自分にもどかしさを感じながら。しかし、そう思う間もなくハザマが再びその口を開いた。

「全くその通りですよラグナ君。この世界の運命はもう変えられない・・・あなた方はもうその運命を受け入れるしか・・・」

「運命は変えられない、だと？では、我が今この場所に現れるのも運命か」

ハザマが言い切る前に突然謎の女がその場に現れた。その女は腰まである白いロングヘア、全身を黒いコートで覆い、顔立ちは美しいが、鋭い眼光の奥の瞳に謎の文字が浮かび上がっており、それが人ならざるなにかを連想させていた。

「な、なんですか、あなたは！？こんな所まで一体・・・」

突然の乱入者に誰もが驚きを隠せない中、ハザマが干渉を試みる。

「ユウキ^リテルミ。貴様が言っている運命は、『我にこの世界を消滅^トさせる』ということなのか。」

名も知らぬ女に正体を見破られ、ハザマ、否、テルミが動揺する。

「テメエ、なんで俺を知ってやがる！！つーか俺様の質問に答える！！！」

「黙れゴミが。貴様の様な一個体に我が用があると思っているのか？」

「俺をゴミ呼ばわりとはいい度胸だな、後悔しやがれ！！蛇翼崩天刃！！！」

自分を完全に見下している女に対して激怒したテルミは超必殺技『蛇翼崩天刃』を繰り出した。天を切り裂く刃が如くテルミの強烈なハイキックが女に直撃した。しかし・・・

「この程度か、ゴミめ。」

「な、なんだコイツ、全然効いて・・・ぐわあ！！！」

全く効果が無いことに驚愕する間もなくテルミは女の指一本で壁に激突し、気絶する。女はテルミに蹴られた場所を軽く振りはらうと、やがて、口を開いた。

「よく聞けゴミどもよ、我が名はネメシス。あらゆる世界を消滅させる者。貴様らには最早この運命からは助かる術は無い。おとなしく運命をとにもするのだな。」

そう言うつと、ネメシスはノエルの方へと浮遊しながら向かっていった。あまりの恐怖にノエルはただおびえるばかりだ。

「ソード・アイリス！」

しかし、それをさせまいと突然ネメシスの目の前に雷が落ちる。そして、それを行った張本人、ツインテールで場違いなほど豪華なドレスを着たヴァンパイアの少女、レイチエル「アルカードがノエルをかばうように前に出た。」

「たいそうな出で立ちねマドモアゼル。とりあえず、あの目障りな緑虫を倒したことは感謝するわ。」

「レイチエル」アルカードか・・・勝ち目も無いのになぜ立ちはだかる。」

「なぜ？あなたこそこの子になんの用事があるのかしら。」

レイチエルが余裕の表情でネメシスになぜノエルに用があるのかを訪ねる。

「貴様に教える必要など無い。失せる。」

「そつもいなくてよ、テンペスト・ダリア！」

そう言うと、使い魔…ギイの手によって暴風が巻き起こった。レイチエルはもう一匹の使い魔…ナゴがレインコートになり、雨に濡れていない。しかし…

「全くもって下らん、この程度か。」

「な…?」

この暴風の中、ネメシスが急接近し、拳をレイチエルのみぞおちに直撃させる。凄まじいスピードに対応できず、レイチエルがその場で崩れ落ちる。そしてネメシスはノエルの手を掴んだ。

「や、やめて下さい！あなたまでなぜ私を！」

「黙っている、破滅の巫女。貴様は私についてくれば良い。」

そう言い、ノエルに謎の言葉をかけると。ノエルは気を失ってしまふ。

「おい、テメー！ノエルをどうするつもりだ！それに破滅の巫女ってのはどういう事だ！」

この状況を良しとしないラグナがネメシスに問い訪ねる。すると、ネメシスが衝撃的なことを口にした。

「よいだろう教えてやる。我が全世界を消滅^{デリート}するためには、破滅の巫女の力が必要なのだ。この後も他の世界で集める必要があるが、この女は最初の一人だ。」

「何…だと…?」

「話は終わりだ。貴様らには眠ってもらおう。」

話を終えたネメシスが手のひらを突き出し、謎の波動をラグナ以外に放つ。それをくらったジン達がその場に崩れ落ちた。

「ジン！サヤ！お面野郎！」

「さて、貴様にはさっさと消えてもらおうか。異空間の果てにな！」

消される！そう思っているが恐怖でラグナの足が動かずにいた。刻一刻とネメシスが近づいてくる。生きてきた中で最大の恐怖が今、ラグナの心を満たしていた。

そして、カグツチからラグナ「ザ」ブラッドエッジは完全に消滅した……

「ラグナ……」

声が聞こえる。しかしまだ起きる気にはなれない。

「ラグナ！」

俺は、何をした？あの女に対して何ができた。

何もしちゃいない。ジンとサヤがさらわれた日と同じ……

「ラグナッたら！」

それでも自分を起こそうとする声にラグナは目を覚ました。

プロローグ（後書き）

プロローグ終了です。

プロローグとか言っときながら相当長くなりました。（汗）
おまけにトゥルーエンドの続きなのですが、原作と全然セリフが合ってなくてすみません。

文法が変なところも多々あると思いますが、出来るだけがんばりますのでよろしく願います。

ラグナ（以下ラ）「おい、作者！俺の片腕どうなったんだよ！原作だとココノエが直してくれた俺の片腕！」

作者（以下作）「大丈夫。次の話で明らかになるから。」

ラ「テキストに流すな！心配になるじゃねーか！あと、あの女！ネメシスつつたか。あいつは何者なんだ？」

作「それはまだ明かせないよ。でも、君が生きてると知ったら全力で倒しにかかるだろうね。」

ラ「マジかよ、めんどくせー・・・」

REBEL 1 目覚めた場所は別世界（前書き）

突如現れたネメシスの手によって異空間の果てに飛ばされたラグナ。しかし、誰かが自分を起こそうとする声が聞こえ、目を覚まそうとしていた。

今回の話とあるキャラからもらえるアレが2倍になっていますが、この小説のオリジナル設定であり、とくに意味はありません。

REBEL 1 目覚めた場所は別世界

「いつまで寝てるの、いい加減起きなさい。」

メガネをかけた女性がラグナをベッドから起こしにやってきた。ラグナは眠そうにしながらも、どうにか体を起こす。

「ああ、おはよう、ルツカ。」

「全く・・・みんなはもうご飯食べたんだからラグナも早く食べちゃいなさいよ。」

そう言いながらルツカと呼ばれた女性はカーテンを開ける。眩しい日差しが寝起きのラグナにふりかかり、思わずラグナは手で光をさえぎった。

「それにしても・・・なかなか良い感じじゃない。ルツカ様お手製の義手は。」

「ああ、まあな。」

自分の腕に付けられた義手の調子を試すかのようにラグナは握り拳を作る。

ネメシスの手によってカグツチから消滅したラグナだが、偶然にも別の世界へ続く道にのり、奇跡的に助かったのであった。しかし、その時の話によるとラグナは意識を失っており、その時に目の前に

いるルツカに発見され、おまけに義手まで付けてもらったとのこと。今は療養も兼ねて、ルツカの家に住居させてもらっているのだ。

まあ、ルツカの研究の手伝いじっけんだいをしたり、キッドのおむつを取り換えたりもしているが。

「なによ、そのやる気ない返事は！」

「いいじゃねーか別に。んじゃ、さっさとメシ食ってくるわ。」

ルツカの反論を無視してラグナは階段を降りる。

「あら、ラグナ。おはよう、遅かったわね。」

「おう、やつと起きたかお寝坊さん。」

「おはよう、ララさん、タバンさん、それにキッド。」

リビングにてルツカの両親とキッドにあいさつするラグナ。そしてそのままテーブルにある自分の朝食に手を出そうとした、その時・

「行ってきま――――――」

「――すッ――！！！！」

まるでタオカカの様なスピードでルツカが外出していった。

「なんだアイツ、なんであんなに急いでるんだ？」

「忘れたのかラグナ、王国建立祭で新国王夫婦が参られるからその

ための準備をしないと行けないって。あれ？ひょっとして聞いてなかったか？」

「うん、ていうか今日祭りの日だったのか？」

この世界に来たばかりで祭りがあることなど知らなかったラグナ。なんでもないんだよアイツと心の中で悪態をつきながらパンをほおばる。

「まあな、2年前にこのガルディア王国の新王の計らいで毎年5月16日に祭りが開かれることになったんだ、まあその新王ってのがルツカの幼馴染の・・・」

「ふーん。ま、どーでもいいけど、あとで行ってみるか。あ、ごっそさん。」

タバンの話を適当に聞き流し朝食を終えたラグナ。しんよこーシヤツの上に黒い服と赤いジャケットを身にまとい、外へ出た。しばらく歩いて突然ラグナが立ち止まる。

「クソ・・・何してんだよ俺。あの女からノエルをさっさと助けださねーといけねーってのに・・・」

本来なら早くネメシスを倒しノエルを救い出さないといけないラグナだが、今の彼には異空間を渡る術がない。何もできない自分にいらだちを感じながらも歩き出し、ラグナは一つの決心をする。

「頼んでみるか・・・あいつに。」

だが幸いなことにルツカは相当腕の立つ科学者。もしかしたら異

空間を渡る術を作ってくれるかもしれない。いや、作ってもらわざるをえないのだ。そうでなければいずれこの世界も元の世界も消えてしまうのだから。そう決心して再び足を進めるラグナは気がつけばリーネ広場に到着していた。

「ここがリーネ広場か・・・結構でけえな。」

予想以上にぎやかな空気にラグナは言葉をもらす。見渡す限り人、人、人。笑顔の親子がいたり、仲のよさそうな男女がいたり、早飲みで熱中する男どもがいたり・・・そんな中ラグナは準備で忙しいルツカを探していた。

「おついた。おーいルツ・・・」

ルツカを見つけ声をかけようとしたが、どうやら相当忙しそうだ。邪魔をしてはいけないと思い、ラグナは別の場所を見て回ることにした。そこで、ある人ばかりを見つけた。

「ん？ここになんかあるのか？」

人だかりをかき分け、ラグナは何があるのかを確かめる。すると、何やら赤いロボットが中央におり、そいつに負けたと思われる男が悪態をつく。

「畜生！ゴンザレスのヤツますます強くなってやがる！勝てるかこんなもん！」

ゴンザレスと言うロボットは次の挑戦者を待ってるかのようにたたずんでいる。そんな中、ラグナがゴンザレスの目の前に立った。

「お、兄ちゃん、ゴンザレスに挑戦するのかい？やめとけよ。兄ちゃんみたいなヒョロヒョロじゃたちまち病院送りだぜ。」

野次馬の茶化しを無視し、剣を構えるラグナ。ラグナを挑戦者と認識したゴンザレスは突然歌いだす。

「オーレハゴンザレス オーレハツヨイゼ オーレニカーッタラ
30ポイント」

「ちょ、オメーはジャイオンかよ！まあいい、リハビリにはちょうど良いぜ、かかってきな！」

野次馬達が騒ぎだし試合が始まった。開始早々ゴンザレスのパンチがラグナに襲いかかる。しかしラグナはそれを軽々と避け、そのまま立ちBからの立ちCを繰り返した。

「ヘルズフアング！」

暗黒闘気を纏つての突進、さらにそこからもう一発追撃を加え、ゴンザレスを吹っ飛ばした。

「まだまだあ！」

吹っ飛ばしたゴンザレスに対して、ラグナはさらにジャンプし、追撃を仕掛ける。

「ベリアルエッジ！」

急降下攻撃からのバウンドで再びゴンザレスが浮かび上がる。それでもラグナの追撃は止まらない。

「まだ行くぜ。デッドスパイク！」

地面から怪物が飛び出し、怪物に触れたゴンザレスがきりもみ回転をする。それに合わせ、ラグナは水平に剣を構える。どうやらこの大技で決めるようだ。

「これで終わりだ！カーネージ・・・」

剣を振り降ろし、ゴンザレスをたたき落とすラグナ。そして・・・必殺の一撃が繰り出された。

「シザーーーーーー！ーーーーーッ！！！！！」

ラグナの超必殺技がフィニッシュを決める。暗黒の衝撃波と斬撃のコンボが繰り出されゴンザレスは大きく吹っ飛ばされた。

「デイスティションフィニッシュ・・・ってか？」

勝利を確信し勝利ポーズをとるラグナ。だが、倒したと思っていたゴンザレスが再び立ちあがった。

「ま、マジかよ。まだやる気かよアイツ・・・」

メンド臭そうに髪をくしゃくしゃするラグナ。だが、ゴンザレスは戦うために立ちあがったのではなかった。突然マイクを手に取りジャ。アンのように歌いだす。

「アーンタハツヨイ アーンタハスゴイゼ オーレニカッタカラ
30ポイント」

勝者をたたえる歌が終わり、お祭り用のポイントを手に入れたラグナ。その後、しばらくして野次馬たちの間で拍手と歓声が巻き起こる。

「スゲーよ兄ちゃん！ゴンザレスを無傷で倒すだなんて！」

「感動した！あまりのパーフェクト勝負に感動した！」

野次馬たちにもみくちゃにされながら、なんとかその場を抜け出してラグナは祭りの続きを楽しむことにした。

「悪くねーな、この義手……」

しかし、まだ誰も気づいていない。のちにこの広場が恐怖に包まれるなど……

REBEL 1 目覚めた場所は別世界（後書き）

REBEL 1の執筆が完了いたしました。

ハイ、多くの人が知っているであろうあの有名RPGの世界にラグナを飛ばしました。というか彼を最初からこの世界に飛ばす設定でした。

今回がラグナの初バトルになりましたが、物語の都合上本来つながらないコンボが出来上がってしまいました。あんなコンボはティガーにやっても多分無理です。

ルツカ（以下ル）「ハイハイ、ルツカさんですよ。ところで作者、私の世界は原作から2年もたってるのね。」

作「まあね、グッドエンドの続きだから君の幼馴染は王様だけだね。」

ル「本当、なんか色々負けた気分よ・・・」

ラ「ところで作者、ルツカとナイチチの差別化はちゃんとしとけよな。マジで。」

作「うん、出来るだけ頑張るよ。」

ル「本当に大丈夫かしら、この作者・・・」

ラ「なあ、気になったんだけどよ、祭りが5月16日って意味あるのか？」

作「いや、僕の誕生日なだけ。」

ラ「おいっ!!」

REBEL 2 暗躍する者（前書き）

リハビリ程度にゴンザレスにパーフェクト勝ちをし、大量のポイントを獲得したラグナ。一方、新たな脅威が現れようとしていた。

今回の話でラグナは戦いません・・・そしてまたオリキャラが登場します。

REBEL 2 暗躍する者

ここはガルディア王国。現在の国王が2年前に就任してからは、事件らしい事件は全く起こらずいたって平和そのものである。

街から大分離れた森の奥・・・そこにガルディア城が建てられており、そこでは国王夫婦が王国建立祭へ向かう準備を行っていた。

「クロノ王、準備の方はよろしいですか？」

大臣が呼ぶと、クロノと呼ばれた王は答えた。

「ああ、もう準備はできた。大臣はマールを呼んでくれないか？」

「かしこまりました。王妃様をお呼びにまいります。」

クロノ王の命に大臣が応え、マール王妃を迎えに行った。しばらくしてクロノ王は久しぶりに会う幼馴染のことを思い出した。

「元気にしてるかな・・・ルツカ。っていうかまた変な発明してないだろうな・・・」

心配するクロノ王、ルツカは昔から変な発明をして自分たちを困らせてきたので心配するのも無理はないのかもしれない。そう思っている間にマール王妃が準備を終えたようだ。

「お待ちせ、クロノ。」

ずいぶん気安く呼んでいるが、二人はかつて世界を救うためとも

に戦った仲なのだ。そのため、とても王家とは言えない口調でも全く気にならないのであった。

「待ってたよマール。さあ、行こうか。」

「うん、そうだね。」

そんな友人同士の様な会話をしながら、二人はリーネ広場へ向かった。だが、リーネ広場へ続く道の途中にはガルディアの森が存在し、どうしても時間がかかってしまう。もともとは敵軍の進行を妨げるための自然の迷路が今では邪魔でしかないとは思っている。

「思えば色々あったよな、こんなメンドくさい森の奥のゲートに入って、そこからいろんな時代を旅して・・・ハハハ、懐かしいな。」

「ホントだよな。でもさ・・・そのおかげでクロノ達と一緒にラヴオスを倒してクロノと結婚して。私は今とっても幸せだよ。」

「マール・・・んっ？」

「どうしたの？」

「何者だ？姿を見せろ！」

誰かの気配を感じ、その方向を向き声をかけるクロノ王。気づかれた男が姿を現し、二人に対して自分自身を名乗り始めた。

「初めましてクロノ王、マールディア王妃。私はナルキッソスと申します。お祭りへ向かわれる道中にお暇を頂くことをお許しくださ

い。」

ナルキツソスと名乗った男はゆっくりと二人のもとへ向かっていく。この怪しい男に不信感を感じ、クロノ王がナルキツソスに質問をした。

「そなた・・・一体何が目的なのだ？ 邪な気配よこしまを発するほどのことであるのか？」

「はい。大変申し上げにくいのですが・・・」

他人への王族口調でたずねるクロノ王。そのクロノ王の質問に対して、ナルキツソスの返答はとんでもないものであった。

「破滅の巫女、マールディア王妃の身柄をこちらへお渡しください。」

「何！？ そのようなこと、応じるわけが無いであろう！ それに破滅の巫女とは一体なんなのだ！」

「やれやれ・・・やはり答えはノーですか。仕方ありませんね・・・」

破滅の巫女の一人、マール王妃の身柄を渡してもらおうと言う要求を飲まれなかったことに悪態をつくナルキツソスだったが、すぐに体制を整え、こう言った。

「無理やりにも奪ってしまいなさい、我が手駒達！」

ナルキツソスがそう言うと、漆黒の鎧に身を包んだ兵士10人が

2人に襲いかかった。

「気をつけるマール、奴の狙いは君だ！」

「うん、分かってる！」

そう言っている間にも漆黒の兵士は距離を詰めていく。ギリギリまで迫ってきたところでクロノ王は腰の日本刀を抜き出した。その手に持っている刀の刀身は虹色に輝いている。

「かまいたち！」

クロノ王が刀を一振りすると凄まじい斬撃が漆黒の兵士達に襲いかかり、一瞬のうちに7人が切り刻まれ倒れ伏す。なんとか攻撃をくらわずに済んだ3人がクロノ王に接近しようとするが、それは無駄な行為でしかなかった。

「アイスガ！」

マール王妃が詠唱すると巨大な氷塊が残りの3人の上に覆いかぶさり、そこには3本の氷の棺が残されていた。あっという間に部下を全員倒されたナルキッソスだが全く動じていない。それどころか余裕の表情である。

「さすがは国王夫婦……ですが、これで安心するのは早計でございますよ。」

「ほう……部下を全員倒されておいてずいぶんと余裕だな。」

「いえいえ、さすがに今は引き返しましょう。それでは、祭りをこ

ゆるりとお楽しみください。」

意味深な言葉を残し、ナルキッソスはその場を去って行った。

「クロノ・・・」

「ああ、なんか嫌な予感がする。気をつけないとな・・・」

マール王妃に気をつけるように言い、二人はリーネ広場へと向かうことにした。

「オイイイイイイイイイツ！ やつと俺喋れるよ！ どんだけ待たせるんだよ馬鹿作者！」

こんなメタ発言をしているのはすっかり忘れられていた主人公ラグナ・ザ・ブラッドエッジである。現在彼はリーネ広場で祭りを見て回っている。ある露店で誰が食べるのか分からないほど甘いパフェをおいしそうに食べたり、謎のテントでそっくりな三人組を当てて猫のエサをもらったり、なんだかんだいって楽しんでいた。

「どうしようこのエサ・・・師匠のみやげにしようかな・・・」

賞品を自分の師匠に渡そうと思っている迷惑な男である。そんなことを思っている間に広場の中央が騒がしくなってきたようだ。ラグナもそれを確かめに中央へ向かった。

「あいつらが・・・国王夫婦か？」

ラグナの視線の先には、国民に迎えられるクロノ王とマール王妃がそこにいた。ここまで慕われていることを考えるとよほど立派な国王なのだろう。もっとも、ラグナはこの世界の政治など正直どうでもよいのだが。

「ん、ありゃルツカじゃねーか？」

しばらくするとルツカが二人の目の前に現れた。二人ともルツカにやたら親しげである。

「そっついやタバンさんが言ってたっけか。ルツカと国王が幼馴染で、王妃とも親友だって。」

全く世の中分らないものだ・・・そんなことを思いながら三人の話に耳を傾ける。

「久しぶりねクロノ、マール。クロノったらずいぶんと王様っぽくなってきたじゃない。」

「そ、そうか？ていうかそっちはどうなんだ。また変な発明してないだろうな？」

「フフ、ルツカって色々面白いもの作ってたからね。」

「ちよっ、何よ二人とも失礼ね！」

なんだかとても楽しそうな会話だ。自分にもこんな時があったな・
・ラグナがそんなことを思い昔を懐かしんでいると突然ルツカに呼ばれ、しぶしぶながら三人の方へ向かって行った。

「紹介するわ二人とも、この糖尿病寸前侍みたいな男が居候のラグナよ。」

「ラグナだ、よろしく。」

オメーだつてア。レちゃんっぽいじゃねーか・・・そう言つてやりたい気持ちを抑え、ラグナは二人に軽く挨拶をする。とても国王夫婦に対する挨拶ではないため、ルツカに怒られた。

「あんたねえ・・・いくらなんでもそんな挨拶失礼でしょ。ちゃんと敬語を使・・・」

「いや、いいよルツカ。お前の友達なら無理に言わせなくても。初めまして、クロノだ。」

「そうそう、クロノの言うとおり。私はマール、よろしくね。」

別にルツカの友達では無いのだが、ここは黙っておくことにした。しばらく話しているとルツカがクロノ王の到着がやけに遅かったことについて聞きだした。

「そう言えばあんた達、去年より来る時間遅かったじゃない。なにかあったの。」

「まあな。途中でナルキッソスって奴に襲われてな、まあ軽くあしらつてやつたんだが。」

そんなことラグナにはどうでもいい話なので、会話に参加せず適当に聞き流している。三人もとくに気にせず話を進めていたのだが、ある単語をマール王妃が言った途端ラグナの顔色が変わった。

「でも、なんか府に落ちないことがあるの。なんか私が破滅の巫女の一人とか・・・」

「破滅の巫女だと!？」

突然会話に入り込んだラグナに対して三人はひどくあわてたようだ。それになぜ見ず知らずの他人である彼が破滅の巫女を知っているのか。ルツカはそのことをラグナから事情を聴きだそうとした。

「どうしたのラグナ？破滅の巫女を知ってるの？」

「あ、ああ、実は・・・」

ラグナは三人に説明した。ネメシスが異世界中から破滅の巫女を探しているということ。自分がいた世界でノエルがすでに連れ去られてしまったこと。ネメシスの手によって本来異空間の果てに飛ばされるはずだったが、偶然この世界に来てしまったことを・・・。

「そういうことだったのね。ネメシスって名前の女が破滅の巫女を使って全世界を消そうとしている。それはなんとしても止めたいところだけど・・・」

「それでなんだけだよ、ルツカ・・・」

全てを話し、ラグナはルツカに言おうと思っていたことをようやく言いだした。

「異空間を渡る道具があるなら俺に譲ってくれ、頼む!」

ネメシスの狂った野望を止めるため異空間を渡る道具を譲ってほしいとお願いをするラグナ。それに対するルツカの返答はとても真つ当なものだった。

「あんだねえ・・・仮に私がそれを持つてたとして、あんたはネメシスって女のいる世界がどこだか知ってるわけ？」

「え？あ、そーいや全然わかんねえわ。」

全くと言っていいほど無計画なラグナに対して、ルツカは呆れながらさらに話を続ける。

「分からないのに異空間を渡る道具を持つたって全く意味無いじゃない！それに、さっきの話を聞いた限りあんたはその女に何にも出来なかったそうじゃない。そーなんでもよくネメシス倒すとか言えたものね。無策にもほどがあるわよ、ったく・・・」

「うるせーな！それほど切羽詰まってるだよこっちは。ていうか異空間渡れなきゃアウトなの！それでもう『残念、俺の冒険はここで終わってしまった』なの！お分かり？」

事前準備の一つも無しに行くなと言うルツカと渡ればそれで良かやのそこいと言っラグナ。二人の口論が始まりすっかり蚊帳かやのそこの外の国王夫婦であつた。

「うわー、どうしようクロノ・・・」

「昔からこうだからな、ルツカは・・・ん？」

上空から花火とは違つ音に違和感を感じた二人。その直後、爆音

とともに広場が炎に包まれた。

「何？何？一体何なの？」

「分からん、行ってみよう！」

音のした場所へ向かう国王夫婦。それに遅れてラグナとルツカも二人を追って行く。四人が向かった場所には、国王夫婦が森で出会ったナルキッソスが大軍を率いて佇んでいた。

REBEL 2 暗躍する者（後書き）

REBEL 2 終了です。

今回はラグナモルツカも戦っておりません……ですが、次回は必ずこの二人を戦わせます。ひょっとしたらオリジナル技を出すかもしれません。皆さん、どうかご期待下さい。

ラ「おい、ブレイブルーやれよ。」

作「ゴメン、次からは気をつけるから！」

ル「前半が完璧にアレよね……私達完璧に無視されてて。」

作「だからそれを言わないで！次活躍させるから……。」

REBEL3 たった二人の激闘（前書き）

国王夫婦は森で謎の男、ナルキッソスに襲われるがこれを撃破する。しかし、マール王妃がノエルと同じ破滅の巫女の一人であることがここで判明した。一方のラグナはルツカに異空間を渡る道具を譲ってほしいと頼むが、無謀なことをするなとルツカに怒られてしまう。そんな折、再びナルキッソスが現れた。

REBEL3まで行きましたが文章力がいまだに上がりません。あと、ラグナ達がオリジナル技を披露します。

REBEL 3 たった二人の激闘

「な、何が起こったんだよーッ！！せつかくのお祭りだったのに・
・・」

「そんな・・・なんでこんな事に・・・」

突然の襲撃に祭りの参加者達が逃げ惑う中、ナルキッソスが口を開いた。

「クロノ王、マールディア王妃、お祭りはお楽しみいただけましたか？さて、クロノ王・・・もう一度お尋ねいたします。マールディア王妃の身柄をこちらへお渡しください。」

一度断られたため今度は大規模な攻撃を行い無理やり要求を通そうとする卑劣なナルキッソスに対し、クロノ王は一步も譲らずに言い返す。

「ナルキッソス、何度来ても答えは変わらん！貴様こそ今すぐ攻撃を中止せよ！」

「この男がナルキッソスですって！」

クロノ王から聞いた男を見たルツカが驚愕の声をあげた。今、目の前に立っている男が邪悪な気を発しており只者ではないと感じているようだ。そしてもう一人、この男の邪悪な気を察した男…ラグナが二人の間に割り込み、ナルキッソスに質問した。

「おい、そのテメー、テメーはネメシスって女の何なんだ？」

「はて？なぜ私のご主人様マスターの名前をあなたが御存じなのでしょうか？」

「ご主人様マスター……だと……？」

目の前にいる男がネメシスの部下と知り驚くラグナ。また、ナルキッソスも初めて来る異世界の人間がなぜ自分の主の名前を知っているのか疑問に思ったが、そんな事などお構いなしにナルキッソスは話を続けた。

「まあそれは置いてですね、ご主人様マスターは異空間に存在するすべての世界を……」

「んなこたあ聞いてねえ、俺をテメーのご主人様マスターの場所に連れてけ！んで、ノエルを開放させてもらっぞ！」

「なぜですか？なぜあなたがノエル＝ヴァーミリオンまでもご存じで？」

「いいから俺の要求を飲め、このクソ野郎！」

「待つてラグナ。」

ラグナの要求を全く聞こうとせず話を続けようとしたナルキッソスだがそこにルツカが割り込み、今度は彼女が質問を始めた。

「あなた、ナルキッソスって言ったわね。私も質問させてもらっわ。あなた達はなぜマールが破滅の巫女だって分かったのかしら？」

なぜマール王妃が破滅の巫女の一人であることを知っているのか、正直言って答えてもらえるわけがないと半ばヤケクソ気味だったが、意外にもナルキッソスから返答が返ってきた。

「お答え致しましょう。^{マスター}ご主人様はどういうわけか破滅の巫女の存在する世界、そして彼女達の名前をご存じでして、^{マスター}私達はお主人様のご命令通り実行している・・・このような答えでよろしいでしょうか？」

「それならどうしてネメシスは自分から動こうとしないの？」

「はい、いくら破滅の巫女とはいえそのままでは力を発揮できない状態^{マスター}でして、ご主人様は力の開放に従事されなければならぬため私たちがこうして行動しております。ですが私達には名前しか伝えられず、一目見て分かるわけでは無いのでとても大変でございます・・・」

ナルキッソスが言うにはネメシスは破滅の巫女の力を開放するために自分が動くわけにもいかず、自分の部下を使って他の世界から集めることにしているらしい。話を聞き終えたルツカはもう一つの疑問をナルキッソスから聞きだした。

「それで・・・破滅の巫女はマールを含めて何人いるの？」

破滅の巫女の人数は何人いるのか・・・ナルキッソスはルツカのもう一つの質問にまで律儀に答えた。

「お教え致します。13人存在しておりまして少々多いんですよ。ですが、ノエル・ヴァーミリオンとピーチ姫はすでに確保しており、残りはマールディア王妃を含め11人。今のところ順調ですよ。」

「ピーチ姫？まあとにかくあなた達の手によってもう二人も捕まっ
てしまったのね。」

「そして王妃さん含めて3人目ってかあ、ふざけんな！これ以上テ
メーらの思い通りにさせるかよ！」

ラグナがそう言うのと剣を構え戦闘態勢をとり、それに続いてルッ
カも銃を構える。

「やれやれ、仕方ありません・・・全軍、攻撃を再開しなさい！」

ナルキツソスの一声で臨戦態勢をとっていた兵士達が攻撃を再開
した。命令を受けた数人の兵士がラグナ達に襲いかかる。しかし・

「デッドスパイク！」

攻撃が来ることを見切ったラグナがデッドスパイクを呼び出し、
敵の兵士をきりもみ回転させて吹き飛ばす。吹き飛ばされた兵士に
巻き込まれ、さらに数人の兵士が倒れていった。

「喰らいなさい、ナパームボム！」

追い打ちを掛けるかのようにルッカの爆弾が敵陣に放り込まれ多
くの兵士が火だるまになり、それを見た兵士達が一度攻撃を中止し
た。

「まだまだいやがる・・・ルッカ、あんたはさっさと逃げろ！ここ
は俺が食い止めるからよ！」

「何言つてんの、私も戦うわよ！あんた一人を置いていけないから！」

「待てルツカ！俺も戦う、マールを奴らに渡さないために！」

「それはダメよクロノ！あんたはマールを連れて逃げなさい！こういう時に国王のあんたが他の人達を導くのが王の役目じゃないの！」

自分に任せて先に行けと言うラグナに対して自分も残って戦うと言いだしたルツカ。クロノ王も残って戦おうとしたがルツカに止められ、マール王妃とともに他の人達を連れて逃げる準備を整える。

「行こうマール。ここは二人に任せよう。」

「うん分かった。ルツカ、ラグナ・・・必ず無事で戻ってきてね。」

そう言い、二人はその場を後にした。ルツカは振り向かず任せてと言い、ラグナは無言のまま親指を上突き立てた。

「ここは絶対に通さないわ、クリエ・クラテール！」

ルツカが詠唱すると先程まで国王夫婦が通って行った道が凄まじい火柱に包まれる。その火柱は遥か上空まで燃え上がり、飛び越えることも不可能なほどであった。

「あなた方二人で残り900人と本気で殺り合うつもりですか。いいでしょう・・・全軍、攻撃を再開しなさい！」

ナルキッツソスの命令で残りの兵士全てが二人に襲いかかった。二

人も再び迫り来る大軍を相手に互角以上に渡り合っている。

「遅えよ、ヘルズファング！」

ラグナの突進攻撃で数人の兵士が吹っ飛ばされ、そこをルツカの百発百中の銃撃が追撃をかけ確実に敵の数を減らしていく。

「まだ止まらねえぞ、カーネージシザー！喰われる！！」

「（それにしても、ラグナってこんなに強かったの・・・私のゴンザレスを完封させた男が今年現れたって噂があっただけどまさか・・・」

「おいルツカ、後ろだ！」

ルツカがラグナの圧倒的な強さに驚いている間に兵士に後ろをつかれ、攻撃を喰らいそうになったその時・・・

「チツ、アイツ・・・テラーウイング！」

ラグナの剣：ブラッドサイスから暗黒の波動が直線状にストレートに飛び出し、それを喰らった兵士がその場で気絶した。

「まったく・・・何やってんだアンタは！こんな時にぼーっとしてんじゃねーぞ！」

「う、ごめんなさい。ちょっと考え事してて・・・」

「まあいい、貸しにしとくぞ。」

なんとかルツカを助け出し、その後も二人は次々と兵士をなぎ倒していき、残りの人数は50人ほどになっていた。

「ラグナ、少し離れて！」

「おい、何をするつもりだ？」

「こいつらを一網打尽にするわ！」

そう言つとルツカの指先から炎のビームが放たれ、それで薙ぎ払うかのように残りの兵士を全て焼き払った。どうやらルツカの超必^{デイストリーシ}殺技^{ヨンドライフ}のようだ。

「名づけるなら、ドワ・エクレールつてところかしら。」

「さあ、観念して俺をテーマ^{マスター}のご主人様の所に連れて行け。」

兵士を全滅させた二人だが、ナルキッソスの様子に焦りは見られない。それどころかますます余裕の表情だ。

「なんだコイツ、まだ余裕ぶっこいてやがるのか？」

「クツクツク・・・まさかここまで作戦が順調に進むとは思っていませんでしたよ。お二方には誠に感謝いたします。」

「ど、どういう事よ？」

なぜいまだに焦りの表情を見せずにいるのか二人には分からなかったが、それに答えるかのようにナルキッソスが口を開いた。

「実はですね・・・そこに転がってる彼ら以外にもまだ私の部下はいるんですよ。今頃はもう追いついたのではないでしょう。国王夫婦に。」

「何・・・だと・・・？」

「そ、そんな・・・私達はただの時間稼ぎだったってこと・・・」

「そう言うことでございます。ちなみに、その部下の名前はヤリドヴィツヒと出木杉英才です。それでは、終焉の時までお元気で・・・」

「ま、待て！おい！」

ナルキッソスの目の前に異空間をつなぐゲートが現れ、その中にナルキッソスが入ると同時にゲートは消滅していった。ラグナがそれを追おうと手を伸ばすが時既に遅しであった。

「まずいわラグナ。奴の言ってたことが本当だとするとクロノ達が。」

「分かってる。早く追いつこう。」

何としても奴らの計画を止めなければ・・・防壁代わりのクリエ・クラテールを解除し、二人はクロノ王達と合流するため先を急いだ。

REBEL 3 たった二人の激闘（後書き）

ラ「ねんがんの動く飛び道具を手に入れたぞ！」

作「ってこの小説オリジナル技だからねアレ。」

ル「なんか私までオリジナル技が出てきたんだけど。しかも二つも。」

作「ちなみにルツカの技名はフランス語からきています。ガルデア編が終わったらキャラクターの説明をするつもりですのでその時に詳しく説明します。」

REBEL 4 激突！槍使いと二丁銃士・前編（前書き）

激闘の末ナルキッソスの大軍を蹴散らしたラグナとルツカ。しかし、自分達がただの時間稼ぎに利用されていたことを知り驚愕する。早くクロノ王達と合流するため、二人はリーネ広場の裏口へ急いでいた。

ところで、「そう言つと」を多用している気がしますがあまり気にしないでください。それでは、REBEL 4をどうぞ！

REBEL 4 激突！槍使いと二丁銃士・前編

ラグナ達がナルキツソスの軍勢と死闘を繰り広げていた頃、先に逃げろと言われた国王夫婦は逃げまどう住人達をまとめ、広場の裏口へと導いていた。避難が順調に進み最後の一人を避難させて安心した二人だが、そこにナルキツソスが潜ませた部下が二人の目の前に現れた。

「キキキキキ・・・よう、国王さん。俺はヤリドヴィツヒ様よ。」

「そして僕は出木杉英才です。やはり最後まで残られたようで。」

「貴様達・・・一体何者だ！どこから現れた！」

「キキキキキ・・・俺と出木杉はお前達が来るのを待ってたんだよ。ナルキツソスの旦那の命令でな。」

「何だと！」

クロノ王が驚愕し、なおもヤリドヴィツヒは話を続ける。ラグナ達に当てた900人はただの時間稼ぎであり、本命は自分達二人が待ち伏せし、マール王妃を捕らえると言う事を。

「冗談じゃない！誰があなた達に捕まるものですか！」

「その通りだ！マールを貴様達に渡すわけにはいかない！」

ネメシスの部下なら手加減する必要も無いだろう・・・そう思い、クロノ王は虹色の刀を取り出し戦闘態勢に入った。

「やはりその返事ですか・・・ヤリドヴィツヒさん、やってしまいましょう！」

「おうよ！」

対するヤリドヴィツヒ達も戦闘態勢に入る。ヤリドヴィツヒは手に持った槍を構え、出木杉は二丁の拳銃を取り出した。そして間髪入れずにヤリドヴィツヒがクロノ王に連続で斬りかかるが、クロノ王はそれを全てはじき返す。しかし、反撃しようにも出木杉の的確な銃撃がそれを阻み、中々ダメージを与えることが出来ずにいた。

「喰らいなさい、アイスガ！」

「それが何ですか!？」

マール王妃が巨大な氷による援護攻撃を繰り返すも出木杉が粉々にしてしまう。こんな状況がしばらく続いていたが、二人がまとまった所をクロノ王が大技を繰り出す。

「回転切り!!」

クロノ王が高速で回転しながらあつという間にヤリドヴィツヒ達に接近し、連続で二人を切り刻む。

「は、速い・・・」

「うわぁーーーーっ!!」

凄まじい連撃により、二人はなす術もなく切り刻まれていく。そ

してクロノ王は最後の一撃を叩き込むと同時にマール王妃に追撃を命じた。

「マール、今だ！」

「任せて、アイスガ！！」

「く・・・がはあっ！！」

再び巨大な氷が降り注ぎ、今度は二人に直撃した。だが、大ダメージこそ与えはしたが、まだ二人の戦意は失われていなかった。

「ハア・・・ハア・・・や、やるじゃねーかお二人さん。ち、ちーとばかり油断してたぜ。」

「フウ・・・さ、さすがですね。ガルディア国を治める者だけはある・・・」

「もう諦めろ。貴様達に勝ち目は無い。」

勝算が無い以上降伏するようクロノ王が促すが、ヤリドヴィツヒ達は観念するどころか突然不気味に笑い始めた。

「キキキキ・・・観念すると思ったか。こつちにも奥の手があるんだよ！」

「な、何だと！？」

「水蒸気爆発！！！！」

突如出木杉を吹き飛ばす一撃が放たれた。不意打ちにより出木杉は吹き飛ばされ、そこから追撃の蹴り上げが入り彼はさらに高く吹き飛ばされる。

「待たせたわね、クロノ、マール。」

「ルツカ、それにラグナも！」

窮地に現れたラグナとルツカを確認した国王夫婦が安堵する。さらに二人が大軍と渡り合いながら全くの無傷であることを見て安心したようだ。

「まったく・・・大変なことになってるじゃない。アンタ達がこんなでやられるわけ無いでしょ。」

「ああ、そうだったな。」

「悪い、あのクソ野郎の時間稼ぎに利用されちまってな。ほれ、回復薬だ。」

ラグナから回復薬のポーションを受け取った二人が体力を回復させ、再び立ち上がる。

「ラグナ、君達が来てくれたなら安心だ。4人で奴らをここから追い出そう。」

「いや、アンタ達はここで休んでな。ここは俺達に任せとけよ。」

4人でヤリドヴィツヒ達を追い返そうとクロノ王が言ったものの、ラグナはルツカと二人で戦うと言いだした。おそらく二人で充分倒

せる相手と思つたが故のセリフであらう。だがこのセリフにヤリドヴィツヒは黙つてはいなかった。

「二人だけだとお・・・おい、その白髪とメガネ！お前達が俺様を倒せるとか勘違いしてるんじゃないやろな！？」

「テメーは馬鹿か？倒せるから言つてるに決まつてるだろーが。」

「ラグナの言うとおりね。正直私達で何とかなりそんな相手じゃない。」

「上等だ・・・良いぜ、たつぷり後悔させてやる！行くぞ出木杉！」

「ええ、ですが・・・」

ヤリドヴィツヒに近付き何やら耳打ちする出木杉。それを聞き終えたヤリドヴィツヒが不敵な笑みを浮かべ頷いた。

「だりいな、早く来いよ。」

「キキキキ・・・逃げなかったことを悔やんどけ、行くぜ！！」

そう言つとヤリドヴィツヒがラグナに突進する。だがラグナはそれをあつさり回避し、そこから基本コンボでヤリドヴィツヒを吹き飛ばす。吹き飛ばされたヤリドヴィツヒはすぐに体制を立て直し、手にする槍でラグナに襲いかかる。

「一点集中！」

「インフェルノデバイダー！」

二人の必殺技がぶつかり合うが、ラグナの方が一撃が重くヤリドヴィツヒの体が宙を舞う。更に追撃のアップーからのかかと落としで、彼の体は受け身をとれずに地面に叩きつけられた。

「隙あり！！」

ラグナが空中で無防備になった所を出木杉が見逃さず彼に銃口を向ける。だが、二丁の拳銃からラグナに向かって放たれた弾丸が別の銃声と同時に弾き返される。ルツカの一丁の拳銃から放たれた弾丸が出木杉が放った弾丸を全て撃ち抜いたのだ。まさか弾かれるとは思ってもいなかった出木杉はルツカを睨みつける。

「・・・まさか拳銃一丁で二丁の僕と渡り合えるなんて、甘く見ていたよ、お姉さん。」

「先に言っておくべきだったわね。全力でかかって来なさいって。」

ルツカが出木杉を挑発する。それを見た出木杉が不敵な笑みを浮かべ、ルツカをターゲットと認識した。

「ちっ、中々やるな白髪・・・」

「テメーが弱過ぎるんだよヤリヤリ野郎が。」

ラグナもまたヤリドヴィツヒを挑発する。このセリフがヤリドヴィツヒの逆鱗に触れたようだ。そしてヤリドヴィツヒが力を溜める。

「下手に出てりゃ調子に乗りやがって・・・喰らいやがれ！！」

「気をつける二人とも、水蒸気爆発が来るぞ!!」

「了解、デファンス・セルクル!!」

ルツカが詠唱すると4人を守るかのように円形のドームが展開される。その後、水蒸気爆発が襲いかかるが、強力な防御壁により4人はダメージを受けない。だが、視界を封じられヤリドヴィツヒ達の動きを確認できない状態でもあった。やがて水蒸気爆発が終わると、そこには二人のヤリドヴィツヒが立っていた。

「なんじゃこりゃあ、一体どうなってるんだ!？」

「ヤリドヴィツヒが二人・・・?」

「これが俺様の奥義、ミラージュアタック……。さあて、これで3対2だな。キキキキ、命乞いするなら今のうちだぜ。」

ヤリドヴィツヒ達と出木杉が勝ちを確信したかのように笑みを浮かべる。確かに今の状況はラグナ達に不利の状態だ。しかし、それでもなおラグナ達は戦意を失わなかった。

「へっ、ちょうどいいハンデだなこりゃ。なあ、ルツカ。」

「確かにね、それはそうと・・・クロノ、マール。アンタ達はさっさと逃げちゃいなさい。こいつ等は必ず倒すから。」

「分かった。行こうマール。」

「う、うん。分かった。」

ルツカに逃げると言われ、クロノ王がマール王妃を連れて二人で先に避難した。

「やれやれ、君達みたいなクズがたった二人で何が出来るというんだい？ 全く・・・さつさと王妃様を渡せば良い物を。」

「黙れ、そう言うセリフは勝ってから言うもんだろ。ま、俺達が負けるなんてありえねーけどな。」

「その通り、さつさと観念したらどう？」

出木杉の挑発など意に介さず。二人が戦闘態勢を取り直す。絶対負けるわけにはいかない、その覚悟を身にまといながら。

「ヤリドヴィツヒさん、あの女は僕が殺りますがよろしいですか？」

「ああ良いぜ。俺はあの白髪をいたぶるからよ。」

ヤリドヴィツヒ達も戦闘態勢を取り直す。しばらくの間静寂の間が流れたが、全く同時に5人が動き出した。

「「「「「行くぜ（わよ）！」「」「」「」

REBEL 4 激突！槍使いと二丁銃士・前編（後書き）

ラ「なあ作者、お前に二つほど質問がある。」

作「何ラグナ？」

ラ「最近更新速度遅いけど大丈夫か？」

作「ゴメン、出来るだけ気をつけてはいるんだけど・・・皆さん、本当にすみません。」

ラ「まあ、あんまり無理すんな。それとも一つ。」

作「何だい？」

ラ「もういい加減ブレイブルーの他のキャラ出してやれ、本気で勘違いされてもしらねーぞ。」

作「もちろん出すつもりだよ。皆さん、他のブレイブルーキャラも必ず出しますのでもうしばらくお待ちください！」

ラ「本当に頼むぜ。」

REBEL5 激突！槍使いと二丁銃士・後編（前書き）

クロノ王達が住民達を避難させ終わった所に、潜伏していたヤリドヴィツヒ達が現れる。水蒸気爆発で大ダメージを受け絶体絶命のピンチに陥るが、そこにラグナ達が現れ二人のピンチを救った。そしてラグナ達が国王夫婦に逃げるように言った後、激闘が始まるうとしていた。

色々諸事情がございまして執筆時間が中々とれませんでした、やっと投稿出来ました。それでは、REBEL5をどうぞ！

REBEL 5 激突！槍使いと二丁銃士・後編

夕日が陰り、夜を迎えようとする時間帯。リーネ広場の裏口にてラグナとルツカ、ヤリドヴィツヒと出木杉がぶつかり合う。

「オラオラ、どうした白髪！さっきまでの威勢はよ！」

「ハア！？これくらいでへばる俺じゃねーよ、ヤリヤリ野郎が！」

口ではそういうラグナだが、分身したヤリドヴィツヒの前に攻撃するチャンスを見いだせず防戦一方の状態にあった。

「（やれやれ・・・カルルとの戦いを思い出すぜ。）」

「「一点集中！」」

「当たんねえよ馬鹿！」

片方のヤリドヴィツヒの攻撃を苦も無くかわし、ようやく立ちBから立ちCを叩き込むが、もう一人のヤリドヴィツヒがカバーに入りラグナはそれを回避する。

「「チツ、速ええ・・・」」

「（だが、どっちも同じ強さつてのが厄介だな。しゃーねえ、アレを使うか・・・）」

ラグナは心の中でそう思うと右手を抱え、眼を閉じる。その右手から凄まじいエネルギー、『蒼』の力を開放させ自分自身を更に強

化させた。

「ブラッドカイン！！さあ来いよヤリヤリ野郎が！」

「「キキキキキ・・・見せてもらおうじゃねーかその力！」」

一方、ルツカと出木杉は激しい銃撃戦を繰り返していた。本来は二丁の出木杉の方が有利だが、ルツカの銃撃の方が上回っており、ほとんど互角の勝負である。ただ、一丁のルツカの方がリロードの回数が多く、その分出木杉の攻撃回数の方が多いのも事実だった。

「やるじゃないの坊や。このルツカ様と渡り合える銃さばき、敵ながらあっぱれよ。」

「褒めても何も出ないよお姉さん。バレットストーム！」

「効かないわよそんなもの！」

出木杉がジャンプすると同時に空中から銃弾の雨をばらまくが、ルツカはそれを全て撃ち落とす。弾幕が落ち着いたところを出木杉がリロードするが、これをチャンスと思ったルツカはすぐさま行動に出た。

「ドワ・エクレール！」

「しまった！」

リロードの隙を見逃さずルツカのドワ・エクレールが炸裂する。

出木杉はこれを間一髪避けるが、持っていた銃が片方破壊された。

「まさか銃を片方失うなんてね・・・」

「さあ坊や、さっさと降伏しなさい。今ならこれで勘弁してあげるわ。」

「降伏、ねえ・・・そうもいかないけどね!!」

片方の銃を失った出木杉だが、降伏するどころか突如大型のナイフを取り出しルツカに襲いかかる。突然の接近攻撃にルツカは銃でガードするが、反動で銃を落としてしまった。

「ッ!!銃が!!」

「接近戦が苦手なんて言った覚えは無いよ。お姉さんこそさっさと降伏するべきじゃないのかな?」

「・・・確かに銃は落としたけど、私には魔法がある事を忘れたわけじゃないでしょうね?」

そう言うと同時にルツカの指先からドワ・エクレールが飛び出し出木杉に襲いかかる。しかし、彼はそれをことごとく回避し、ルツカへの距離を詰めていく。

「どんなに強力な攻撃も当たらなきゃ意味無いよ!」

出木杉は最後の攻撃をジャンプして回避し、一気に距離を取ろうとする。しかし・・・

「クリエ・クラテール!!」

「え・・・ウワアアアアアアアアアッ!!」

灼熱の炎の壁が出木杉を巻き込み燃え上がる。空中にいた上に初めて見る攻撃に、出木杉は回避もガードも取れず直撃した。しばらくして炎の壁を解除したルツカは再び臨戦態勢を取り出す。何とあの攻撃を受けても出木杉は倒れていなかったのだ。だが、かなりのダメージを追っているらしく、肩で息をしながらルツカを睨みつける。

「ハア・・・ハア・・・僕が甘かったよ・・・相手に・・・隠し玉が有るかもしれないって事を忘れるなんて・・・」

「もう諦めなさい、私の勝ちよ。油断大敵・・・そう教わらなかったかしら坊や？」

出木杉はなんとか立ちあがったものの、もうほとんど戦闘は不可能なほどの重傷だ。そんな出木杉にルツカは油断したから負けたという事を忠告する。

「さて、こっちは済んだ事だし、早くラグナの加勢に行かないと・・・」

カチャッ

勝利を確信しラグナの所に向かおうとしたルツカに、出木杉がもう一つ隠し持っていた銃を取り出しルツカに狙いを定める。

「やれやれ・・・諦めの悪い子ね。銃が有るなら最初から使いなさ

いよ。」

「そうはいかないよ……この銃……ジャンボガンには弾が一発しか入ってないから……」

「なるほど、最後の切り札って事ね。ま、悪あがきもほどほどに……」

「けど……この銃はとてつもない破壊力を持つからね……それこそ一発で戦車を破壊するほどの……ね。」

「ッ!!?デフアンス・セルクル!!」

ルツカが防御壁を展開すると同時に、出木杉のジャンボガンから銃弾が発射される。出木杉の言っていた通り、凄まじい破壊力の銃弾が防御壁を一撃で破壊し、その余波でルツカも大きく吹き飛ばされた。だが、防御壁のおかげで大したダメージを受けずに済んだ。

「ハハハ……もう……為す術が無いや……」

そう言うとき出木杉は戦う力も失い、その場に倒れた。それを見届けたルツカはラグナの加勢に向かって行った。

「油断大敵……人の事言えないわね、私。」

「クソ、この野郎動きがさっきまでと桁外れだ!」

「オラどうした!さっきから避けてばっかじゃねーか!」

その頃ラグナはヤリドヴィツヒ二人を相手に完全に圧倒していた。身体能力が一気に上昇したラグナに対して、ヤリドヴィツヒは二人がかりでも防戦一方の状態だ。

「デッドスパイク！」

地面からラグナの倍以上はある大きさの怪物が飛び出し、直撃した片方のヤリドヴィツヒがきりもみ回転しながらもう片方にぶつかる。その反動で二人とも別々の方向に大きく吹き飛ばされ、更にラグナが追い打ちをかける。

「ヘルズファング！」

近くにいたヤリドヴィツヒに狙いを定め、凄まじい速度で突進し連続攻撃を加えるラグナ。吹き飛ばした所に剣を構え超必殺技を叩き込んだ。ディストーションドライブ

「カーネージシザー！喰われる！」

「ぐわあああああああああッ！！！」

強化されたカーネージシザーの一撃に耐える事が出来ず、片方のヤリドヴィツヒが消滅した。それを見たもう片方のヤリドヴィツヒがその場を離れようとするが何かにぶつかる。何かと思い確かめると、出木杉を倒したルツカが目の前に立っていた。

「何処へ行くこうなのかしら？」

「げえ、メガネ女！？出木杉はどうした！？まさか・・・」

「そう、そのまさかよ。アンタの相方はあそこで伸びてるわ。と、言うわけで……」

懷からハンマーを取り出し、ルツカはヤリドヴィツヒの顔面をおもいつきり殴った。殴られたヤリドヴィツヒは大きく吹き飛ばされラグナのすぐ側でうずくまる。

「合わせるぞルツカ！さあ覚悟しろよ、ヤリヤリ野郎が！」

「ひ、ヒイツ！」

ラグナはそう言うのと右手に『蒼』の力を集中させ、ヤリドヴィツヒの首を思い切り掴んだ。それと同時にルツカが 炎の壁を作り出す。

「闇に喰われる！」

「クリエ・クラテール！」

「ぐわあああああああああああッ！」

二人の大技を同時に喰らい、ヤリドヴィツヒの体はそれに耐える事が出来ずに完全に消滅した。それと同時にラグナのブラッドカインが終了する。

「ふう、なんとかなったな。」

「ま、最初からこうなると思ってたけどね。さ、私達も生きましょ。」

ルツカがそう言うと二人はこの場を離れる。これでもう大丈夫、そう思っていた矢先……

ドゴオンッ！

突然轟音が響き、二人がその方向に目をやる。何かが起こったのだと二人は察知し、駆け足でその方向に向かって行った。

二人が向かった先にはクロノ王が重傷を負い、その場でうずくまっていた。それを見たラグナが彼の近くに駆け寄り、声をかける。

「お、オイ！国王さんしつかりしろ。何でそんな傷負ってんだ！？」

「ラ、ラグナ……アイツ等が……まだ……」

二人が正面に目をやると、そこには倒したはずのヤリドヴィツヒと出木杉が傷一つ無く立っていた。さらにヤリドヴィツヒの右手にはマール王妃が握られている。

「ちょ、何でアイツがマールを！？」

何が起こっているのかさっぱり分からず混乱するルツカに、ヤリドヴィツヒ達が口を開く。

「まさかこんなに上手く行くとは思わなかったぜ。やっぱり出木杉様々だな。」

「ありがとうございます。さて・・・何で僕達がここにいるのか知
りたそうな顔をしている君達に教えてあげるよ。君達がヤリドヴィ
ツヒさんの攻撃を喰らっていた時に君達には何か見えていたかい？」

「見えてねーけど、そんな時にヤリヤリ野郎が二人に分身したんだろ
ーが！」

「アハハハハ、本当に二人に分身したと思っていたのかい？そん
なわけ無いじゃないか。三人だよ、さ・ん・に・ん。」

出木杉の話の内容は、水蒸気爆発でラグナ達の視界を封じてから
ミラージュアタックで三人に分身して、さらに本物があらかじめ逃
走ルートを待ち伏せしていたと言う事だった。しかし、それでは何
故出木杉がここにいるのか分からずルツカが口を開く。

「それじゃあアンタが何でここにいるのよ！アンタは私が確かに倒
したはず！」

「ああそれね、僕のコピーロボットだよ。まさか気付かなかったの
？」

「コ、コピーロボット・・・？」

「馬鹿じゃないの、鼻が赤かったじゃん。普通気づくと思うんだよ
ね。ま、戦闘に夢中のお姉さんはそんな事気にする暇も無かったも
んね。」

状況が飲みこめず啞然とするルツカに出木杉は馬鹿にした態度で
答える。よほどショックだったのかルツカはその場でへたり込んで
しまった。

「まあ、こんな上手く行って巫女さんゲット出来たんだ。そりゃあ出世もするわな。んじゃ、さっさと行こうぜ出木杉。旦那にはお前のおかげって言うておいてやるよ。」

「おい待てテメー等!!」

ヤリドヴィツヒ達が異空間を渡るゲートで消えようとした時にラグナが声を荒げる。それに気付いたヤリドヴィツヒがラグナに近づく。

「何だ白髪ア？まだ用があるのか？」

「当たり前だ！今すぐ王妃さんを放して俺をテメー等のご主人様マスターの所へ案内しろ!!」

マール王妃を開放しろと言うラグナだが、ヤリドヴィツヒはそれを笑い飛ばす。

「あのなあ、テメーがご主人様マスターに勝てる確率があるわけねーだろ。何故なら、テメーはここで死ぬんだからな!!」

そう言つとヤリドヴィツヒは手にする槍を構え、思いっきり力を溜める。溜める度にその周囲で凄まじい気圧が放たれる。

「な、何だこのヤバさは!？」

「安心しろ、国王さんよりパワーを込めてあるから死ぬときゃあ一瞬だ。」

「危ないラグナ、逃げ・・・」

クロノ王がラグナに逃げるように言う前に、ヤリドヴィツヒの攻撃が襲いかかる。

スバイラル・スピア
「真空螺旋槍！！」

「ぐおおあああああああああああああああッ！！！！」

目にも止まらぬスピードでヤリドヴィツヒがラグナに向かって最終奥義^{トラルヒート}を放った。あまりのスピードにラグナが直撃してしまい、彼の体は宙を舞う。

「嘘・・・ラグナ、ラグナ、しっかりしてよ！！」

ルツカがすぐにラグナの側に駆け寄るが、彼の体は返事も出来ないほどひどい重傷を負っていた。そんなラグナ達を見てヤリドヴィツヒ達が笑いながらゲートへと入っていく。

「キーーーーーキッキッキ！ささと死ねば楽になれたのによお。んじゃ、バイバーイ。王妃さんは頂いてくぜ。」

「クロノ王、それでは失礼致します。せいぜい終焉の時までお元気で・・・」

「待ちなさいよアンタ達！」

ルツカが二人に向かってワイヤーフックを引っかけようとするが間に合わず、二人はマール王妃と共に消え去った。そして、ゲート

が完全に消えたのを見てクロノ王が突然叫び出した。

「そんな・・・マール・・・マールウー――――――ッ！！」

「！！！！」

夜のリーネ広場の裏口にて、若き国王の叫びが鳴り響いた・・・

REBEL 5 激突！槍使いと二丁銃士・後編（後書き）

ル「な、何よこの展開、私達盛大に負けちゃったじゃない！」

作「うん、だってこうしないとダメだと思ったから・・・」

ル「いやいやいや、マールさらわれちゃったしラグナは重傷だし、
こっちの方がダメすぎるわよ！」

作「大丈夫、ちゃんとそう言うフォローはするから。」

ル「本当でしょうね！」

作「は、ハイ・・・」

REBEL 6 旅立つ二人（前書き）

ヤリドヴィツヒと出木杉に勝ったと思われたラグナ達だが全ては二人の策略だった。ヤリドヴィツヒの大技を喰らいラグナが倒され、更にマール王妃をさらわれてしまった。そして、リーネ広場には若き国王の叫び声が木霊した。

皆さん、ラグナが一体どうなったのか気になった方もいらっしゃると思いますが、今回の話で速効明らかになります。それではREBEL 6をどうぞ！

REBEL 6 旅立つ二人

「大丈夫・・・」

「・・・誰だ？」

「大丈夫、ラグナ？」

突然誰かが自分の名前を呼び出した。ラグナが目を開けると、そこにはどこまでも続く花畑。そこに彼の知っている一人の少女が隣に立っていた。

「ニユー・・・何でお前がここに？」

「ラグナ・・・あの時あのヤリ男にやられちゃったんだよ。ラグナを切ったり刺したりしていいのはニユーだけなのにな。」

「おいおい、頼むからそういうこと言わないでくれ・・・マジでビクるから。」

さらっと物騒な事を言う少女：v - 13。彼女は本当に一作目だとこんな事を言ってきました。そんな事を平気で口にしたニユーはさらに言葉を続ける。

「でもね・・・まだラグナはこっちの世界に来ちゃダメなんだ。ニユーはそれを伝えに来たの。」

「こっちの世界・・・ああ、そう言う事が。」

その後、二人は座ったままでいたが、しばらくするとニューが何かを感じ取ったようだ。

「あ．．．ほら、呼んでるよ。もう行かなきゃラグナ．．．」

「呼んでる？ああ、そうか．．．」

誰かが呼んでいる事をニューはラグナに告げる。最初は何の事か分からなかったラグナだが、すぐに理解したようだ。

「ラグナ．．．頑張つてね。」

「ああ．．．」

そう言って再び目を閉じるラグナ。目を覚ますとルツカが自分を見て驚きの表情を浮かべる。どうやらいつの間にかルツカの家に戻っていたようだ。

「ラグナ！目を覚ましたのね！」

「ルツカ．．．ああそうか、ヤリヤリ野郎にやられちまって．．．あ、そう言えばあの後どうなったんだ！？国王さん達は無事なのか？」

自分が意識を失っている間に何が起こったのかを聞くと、ルツカがつらそうに話した。ラグナがやられた後、マール王妃はそのまま連れ去られてしまった事。その後、二人がかりでラグナをルツカの家まで運んだ事を。

「そうだったのか．．．クソッ、あの野郎どもの想定通りじゃねー

か！！ノエルといい、王妃さんといい・・・あともう一人さらわれてたな、確かピンチ姫だっけか？」

「ピーチ姫でしょ。ところでラグナ、ヤリ男に喰らわされた傷は大丈夫なの？重傷だったみたいだけど。」

そう言いルツカはラグナの怪我をした場所を確かめる。重傷を負っているはずのそこには傷跡一つ無く、いたって普通の状態を保っている。

「何で？あれだけの重傷だったのに・・・」

あまりの回復の早さにルツカが驚愕している。実はラグナは右腕の『蒼の魔道書』の力により驚異的な回復力を有しているのだが、当然ルツカが知るはずも無くただ啞然とするばかりだ。しばらく不思議そうにしていると、顔を真っ赤にしたラグナが口を開く。

「あのさ、俺今スゲー恥ずかしいんだけど・・・」

「え・・・あ、ごめんなさいごめんなさい！！」

そう言い急いでルツカ顔はを真っ赤にしながらラグナの服を元に戻した。その後しばらく静寂が続いていたが、突然タバンが部屋に入ってきた。

「おいルツカ、兵士さん達がお前に用があるらしいぞ。多分昨日の事じゃないのか？」

「え、ホントに。分かった、今行くわね。」

城の兵士が来ている事を父に言われて、ルツカは部屋を出て下に降りて行った。そして残されたラグナを見てタバンが心配そうに声をかける。

「そういえばラグナ、怪我の方は大丈夫なのか？」

「ああ、もう大丈夫・・・悪いな、心配かけちゃって。」

「ホントに平気か？念のためもう一日・・・」

「大丈夫だったの！まったく・・・そうだ、俺ルツカについてくわ。国王さんに謝んねーとだし。」

ルツカの後を追うようにラグナも下へ降りる。下にいたララとキッドもラグナの無事を確認してホッとするが、すぐさま家を出てルツカ達と合流した。

「どうしたのよラグナ？急に私達と一緒に行きたいなんて。」

「まあ、国王さんに謝んねーといけないけど城の道分かんねーから一緒に付いていこうかと思って。」

「そう・・・分かったわ。クロノにもアンタの無事を確認させてあげなさい。」

こうしてラグナはルツカ達に付いていく事になった。途中の森でラグナが文句を言ったりしてルツカ達を困らせたが、道を熟知している兵士のおかげで迷う事は無かった。しばらくしてガルディア城に着いた兵士達がクロノ王を呼び出す。

「国王様、ルツカ殿を連れてまいりました。」

「うむ、御苦労。下がって良いぞ。」

クロノ王にそう言われ、兵士達がその場を立ち去る。兵士達が完全に立ち去ったのを確認すると、クロノ王が玉座に着き、ゆっくりと口を開く。

「悪いなこんな時に。昨日ナルキッソス達の襲撃に会ってマールがさらわれてしまつてつらいのはルツカだつてそうなのは分かつてる。」

「・・・・・・・・」

「だから聞きたい事がある。ルツカは奴らの事を本当に何も知らないか？」

「・・・残念だけど、私にもあいつ等が何者なのかはさっぱり分からないわ。分かったのはあいつ等が私達のいるこの世界以外から来た存在だと言う事。ヤリ男と出木杉つて言う男の子から明らかに私達の世界の住人とは違う何かを感じていたわ。それと、あいつ等が物凄い数の軍勢がいると言う事。多分あれだけの軍勢を率いているのはナルキッソスだけじゃない。あれは氷山の一角にすぎないのよ。」

クロノ王の問いに対して、ルツカは分かっているだけの事を説明する。ルツカが言うにはナルキッソス以外にも幹部に当たる存在がいるとの事。そこに話を聞いていただけのラグナが横から口をはさんだ。

「けどよ、分かったとしても俺達には別世界に渡る方法が無えじゃねーか。」

「ラグナ、怪我は大丈夫なのか!？」

「ああ大丈夫だ。そんなことより、今俺はすぐにでもあいつ等をぶっ飛ばしてーんだ。けど別世界を渡る方法が無きゃそれもできねー。もう3人もさらわれてんの俺は指くわえて見てるだけなんだよ！」

「別世界に渡る方法……それならラグナ、実はルツカがその方法を持っているんだ。」

「へー、ルツカが別世界を渡る方法を……。て、あんのかよッ！
！！！！！！」

クロノ王から発せられた一言に驚愕するラグナ。何故ならそんな事が出来そうなのをココノエ以外に知らず、そもそもココノエがない世界に飛ばされたからだ。

「おいルツカ、なんであの時そんな事言わなかったんだよ！それさえありやすぐに奴らをぶっ飛ばしに・・・」

「この馬鹿ッ！！」

ハンマーを取り出したルツカがラグナの頭部を思い切りぶつ叩く。乾いた音が鳴り響きラグナが怒鳴ろうとしたがルツカがさらに言葉を続ける。

「だーかーらー、アンタ一人で負けたのに行ったって返り討ちに合

うだけでしょ！何度言えば分かるのよ・・・」

「イタタタタ・・・たく何すん・・・」

「だから心配だから私も付いていくわ。アンタ一人じゃ心配だし。それにあいつ等・・・マールをさらって全世界の消滅を企てるあいつ等を許すわけにはいかないもの。」

アンタに付いていく・・・ラグナからすれば意外な事であった。確かに共闘した時に気が合うとは思っていたが、今までたった一人で戦ってきた彼にとって仲間という存在は馴染みが無いのだから。

「と言うわけだからクロノ、私はラグナと一緒に行く事にするわ。もちろん二人だけじゃまだ力不足だから他の世界に行つて仲間を集めたりしながら。」

「そうか・・・本当にすまない。俺がここを離れるわけにはいかなばかりに・・・」

「いいのよ。必ずマールや他の巫女達も助けて帰るから。」

申し訳なさそうに頭を下げるクロノ王にルツカが気にしないように諭す。話が終わり城から去ろうとするが、ラグナがクロノ王に言いたかった事を話す。

「なあ国王さん、俺・・・あんだけ勝てるみたいなこと言つていて結局こんな事になつちまつて本当にすまねえ！！」

自分のせいでこうなってしまったとラグナが頭を下げる。

「顔を上げてくれ、ラグナ。」

「え？」

「確かにマールがさらわれてしまったのは事実。だけど君は悪くない、悪いのは全てあいつ等なんだから。それに・・・君達なら必ずマールを助けてくれると信じてる。」

「国王さん・・・」

マール王妃がさらわれた事を悔いるラグナにクロノ王が励ましの言葉をかける。その一言でラグナは安心し、もう一度頭を下げた。

「それじゃあクロノ、行ってくるわね。『2回目』の世界を救う戦いに。」

「二人とも、頼んだぞ。」

そう言い二人はガルディア城を後にした。相変わらずラグナが森の複雑さに文句を言いながらも二人はルツカの家にとどり着いた。これから出発する事を両親に報告した時は二人とも（三人とも？）驚いていたが、何だかんだで色々準備を手伝ってくれた。その間にルツカがラグナを裏の倉庫へ案内する。倉庫に着くと、そこには巨大な乗り物が存在し、ラグナが驚愕の声を上げる。

「スゲー乗り物だな、アンタ個人でこんなもん持ってたんかよ。」

「まあ一から作ったんだけどね。名前は『シルバードR-01』。ことは違う世界を渡る事が出来る乗り物よ。外見は2年前の先代を模してみたの、ってアンタは先代を知らないか。」

マジでどうなってんだ。コイツはココノエとガチでやり合える人材だろ・・・そんな事を思いながらラグナはシルバードR-01（以下シルバード）を眺める。とそこでルツカがシルバードの中へ入り、操縦席に座り起動させる。それを見たラグナは急いで端へ寄った。

「おいおい、起動させるなら先に行ってくれよ。」

「ごめんなさい。でもコイツがちゃんと動くかもう一度調べておこうと思って。」

「たく・・・それにしてもそれってタイヤ駆動なんだな。俺はもうちよっところ、フワーって浮いて空飛ぶつつうイメージが・・・」

「まあ先代は空飛んだけどね。」

ルツカはシルバードのエンジンを一度切ってそこから降りる。軽く会話をしていると、ルツカの両親が荷物を抱えてやって来た。

「おまたせ二人とも。これからの旅の道具、いっぱい買ってきたわよ。」

「回復アイテムと修理用具、それに食料をたっぷり買ってきたぞ。あとルツカ、ウェイブショックのメンテナンスもバッチリしておいたからな。」

ルツカがタバンから愛銃『ウェイブショック』を受け取り、腰のホルスターに装着する。そして二人はシルバードの後部座席に荷物を詰め込み乗り込んだ。もちろんルツカが操縦席でラグナが後部座

席の空き部分である。

「シルバード、ピーチ姫が存在していた世界を検索してちょうだい。」

「ハアッ！？何でもピンチ姫がさらわれた世界に行くんだよ！どう考えても手遅れだろうが！」

ラグナが意味ないと言つてルツカを止めようとするが、すかさずルツカが言い返す。

「あのね、もう既にさらわれた所なら情報が集められるでしょ。それにもしかしたら仲間が増えるかもしれないし。」

ラグナにそう説明している間にシルバードの検索が終了した。それを確認したルツカの両親が二人に声を掛ける。

「頼んだぞ二人共。必ず王妃様を助けだしてくれ。」

「必ず・・・必ず戻って来るのよ！」

「お父さん、お母さん。行つて来ます！！」

「任せな！奴らをぶつ飛ばして来るからよ！！」

最後の挨拶を済ませ、シルバードのエンジンを起動させる。その瞬間、シルバードは一瞬で姿を消した。

「ララ、大丈夫。二人ならやってくれるさ。」

「そうね、信じましょう。あの二人を。」

ルツカの家から大分離れた高台の上に黒いスーツ姿の緑の髪のが佇んでいた。

「ヒツヒツヒ・・・精々頑張れや子犬ちゃん達。今に思い知るが良
いさ、絶望って名の真実をな！」

そう言い残して、男は姿を消した。

REBEL 6 旅立つ二人（後書き）

作「これにてガルディア編は完結致しました。しかし登場人物紹介はもう一つ話を書いてから行つ予定です。」

ラ「あれ、まだなの？そろそろ俺達の新必殺技の紹介もしてほしいんだが・・・」

作「大丈夫、あと一話書いたら必ず紹介するから。」

ル「私達の活躍はまだまだ続きます。読んで下さってる皆さん、これからもよろしく願います。」

REBEL7 無の世界にて（前書き）

クロノ王にマール王妃の救出を頼まれ、シルバードで次の世界へ向かったラグナとルツカ。一方、また別の世界では・・・

今回の話であるキャラ達が某スーパーヒーローを冒読するセリフを出しますが、作者はそのスーパーヒーローが大好きです。お気を悪くされたら申し訳ありません・・・。REBEL7、始まります！

REBEL 7 無の世界にて

ここはとある世界。見渡す限り闇が広がるほぼ『無』の世界。この世界に唯一つ存在する想像を絶するほど巨大な建造物、ここのある部屋に二人の人物が何やら会話をしている。

マスター
「ご主人様、破滅の巫女の力の方はどれほど進行しておりますか？」

「ダイダロスか・・・まだ全然と言ったところか。全く、どこまでも面倒をかけてくれる・・・」

全ての元凶であるネメシスに礼を尽くすダイダロスと呼ばれたメガネの男がネメシスに質問をした所、彼女は不満そうに答える。

「左様でございますか・・・さて、もうそろそろ皆がやって来る時間ですが。」

ダイダロスがそう告げると、水色のロングストレートの男性がこの部屋へやって来た。その手にはマール王妃が抱えられている。

マスター
「ご主人様、失礼致します。おや、ダイダロス博士も一緒に・・・」

「ナルキッソスか・・・！？その女性はもしや！？」

「はい、3人目の巫女のマールディア王妃です。途中邪魔は入りましたが、無事確保いたしました。」

ナルキッソスがマール王妃をネメシスに渡し、魔力で生成された

培養液の中に放り込む。マール王妃がピーチ姫の隣に並べられ、3人の巫女が微動だにせずそこに収まっている状態になった。

「ナルキツソスよ、感謝するぞ。今は他のものが集まるまで待機せよ。」

「ありがとうございます。もしよろしければヤリドヴィツヒと出木杉の昇進を申請したいのですが。あの二人のお陰でございますので。」

「分かった、考えておこう。」

ネメシスがナルキツソスをねぎらう言葉をかけナルキツソスが頭を下げる。その直後、大きな音を立て乱暴にドアが開いた。

「^{マスター}ご主人様・・・アドニス、ただ今戻りました。」

青髪のショートヘアの青年、アドニスが礼儀正しく部屋へと入る。とても悪人とは思えぬ誠実さ故、3人はもう一人いることを察知する。

「^{マスター}オッスご主人様、タンタロスのお戻りだぜ！」

「タンタロス、お前はもっと礼儀を尽くせないのか。入り方といい、話し方といい・・・」

「うつせーよアドニス！テメーはいちいち細けーんだよ！」

かなり無礼な大柄の赤髪の男、タンタロスがアドニスの忠告に対し罵声で応対する。やれやれと呆れた感じでナルキツソスがそのや

りとりを眺めていたが、もう一度ドアが開き紫色の髪の女が入って来た。

「ヘレネ、ただいま戻りましたわ。」

「どうやらこれで全員の様だな。では・・・全員、近況の報告をしてもらおうか。」

幹部が全員そろい、ネメシスが近況の報告を求める。それに答えるかの様に真つ先にナルキッソスが自分の近況を報告した。

「では私から。私は先程の通りマールディア王妃を優秀な部下の陰で無事確保し、次の巫女のいる世界へ向かう前に準備を整えるところです。ただ、銀髪の男とメガネの女に邪魔をされ、多くの兵士を失いました。ま、いくらでも生み出せる人工兵士ですから大して問題は有りませんでした。」

「確保できたなら良いではないか。なぜそんな男達の事を報告する。」

「いえ、ご主人様マスターが連れて来たハザマという男の報告によりますと、その二人が我々と同じく世界を渡る方法を持っており、もしかしたら我々の脅威足り得る可能性が少なからず有り得るとの事でございまして。それで今ここでご主人様マスターにご報告しておこうと・・・」

「そう言う事か・・・しかし、銀髪の男・・・確かあの時・・・」

ネメシスは銀髪の男と言う言葉が気になり、たった一人該当する男の事を思い出す。しかし、自分が異空間の果てに飛ばしてもう存在しないはずの男であり、それ以上は詮索するのをやめた。

「私の報告は以上です。次はどなたが？」

「俺だ、俺に言わせろ！」

乱暴な態度でタンタロスが自分の報告をする。この男、常に上から目線で尚且つ大声なので周りは全員こっそり耳栓をしていた。

「まあ俺はザコい赤帽子の髭の親父は軽くボコして、ピーチ姫つつう女をこないだ連れてきたが、それじゃあ飽き足りねえ。今も兵士達にあいつらをいたぶってやれって命令した所で招集命令だ、マジでやってらんねえ・・・」

「タンタロス、ご主人様^{マスター}の御前だぞ。礼儀をもって・・・」

「黙れつつってんだろアドニス！俺に指図すんじゃないよ！」

アドニスの注意を促すも、大声で怒鳴り散らし黙らせる。アドニスとタンタロスはやがて激しい口論を周囲そっちのけで行い始めた。そんな光景をナルキッソスは呆れながら眺めており、ヘレネに至ってはネイルアートの没頭している。そんな事をしている為・・・

「タンタロス、アドニス、いい加減にせぬか・・・」

ネメシスがタンタロスとアドニスを睨みつける。その怒りの形相を見た二人は恐れながら申し訳無さそうに頭を下げた。それを見たネメシスは平常に戻り、再びタンタロスに質問する。

「分かればよい。それでタンタロスよ、貴様の報告は以上か。」

「おうよ！まあ俺はさつさと次の巫女探しに行くけどな！」

そう言い、タンタロスの報告は終了した。そして全員耳栓を外し、アドニスが自分の近況を説明する。

「では、説明いたします。僕は源しずかの行方を捜索中です。ですが、中々情報が得られず今の所一度も名前が出てこない有様で・・・申し訳ございません。」

「オイオイアドニス、テーママジだせーな！俺なんかもう一人確保してんだぜ。」

「タンタロス！・・・アドニスよ、引き続き源しずかの方は貴様に任せる。期待しているぞ・・・」

「はい、僕の報告は以上です。」

アドニスが頭を下げ、報告を終了させる。ネメシスに怒鳴られたタンタロスはかなりイライラしている。そして最後にヘレネがネイルアートをいったん中止し、近況を報告する。

「私は現在、星井美希を捜索中でございます。しかし、こちらは存在地こそ分かっておりますが、色々な理由により遅々として進展せず・・・申し訳ございませんわ。」

「数々の理由・・・そうか・・・ヘレネ、すまない。我が干渉するわけにはいかないばかりに。とにかく、時間はいくらかかっても構わん。必ず確保するのだぞ。」

「それでは、私の報告を終了させていただきますわ。」

ヘレネは報告を終了させると、さっさとネイルアートに戻る。そして、全ての報告を聞き終わったネメシスが全員に向けて言葉を発する。

「皆、わざわざ集まってくれてすまなかったな。この世界以外を消滅^{イート}させ、この世界を本来有るべき唯一の世界にするため、これからも頼むぞ。」

「ハッ！！（おう！！）」

ネメシスの言葉を聞いて、ナルキッソス達4人が一礼をして部屋を去って行った。それを確認したダイダロスがネメシスに問い訪ねる。

「ご主人様^{マスター}、ナルキッソスが言っていた銀髪の男とメガネの女・・・我々の脅威足り得る存在かもしれません、すぐに対策をなさらねば！」

「分かっている。だがもう少し待て、無闇に動くのは早計だぞ。それに、我にはやる事が有るからな。」

対策を急かすダイダロスを、急がないように言うネメシス。ダイダロスは何も言わずに一礼をし、そのまま部屋を去って行った。

一方、また別のとある部屋で不思議な組み合わせの二人が会話を

している。一人は武器を思わせる出で立ちに、ヤリを装備した異形の男、もう一人は黒いスーツ姿で緑髪の男である。

「ヤリドヴィツヒさん、此度の昇進おめでとうございます。」

「マリオの野郎がいる世界で早速活躍した新入りか・・・変わった奴だな。名前はなんつーんだ？」

「これは失礼しました。私、タンタロス様の部隊に配属されたハザマと申します。以後、お見知りおきを・・・」

ラグナの宿敵、ハザマは自己紹介を済ませ、軽く会釈をする。ヤリドヴィツヒは変な奴と思いながら、彼に一つ問い訪ねる。

「なあハザマ、お前マリオの野郎がいる世界はどうだった。さぞかし苦労したろう。」

「いえ全然、あの世界で英雄英雄言われているものだからどれほどかと思いましたが、全く張り合いの無いザコキャラでしたよ。」

にやけるヤリドヴィツヒに対して、ハザマは堂々と言い放つ。その言い方にヤリドヴィツヒは不機嫌になるが、ハザマは軽く受け流した。イラつきながらヤリドヴィツヒが去ろうとした時・・・

「そつだ、ヤリドヴィツヒさん。」

「何だ、まだ有んのかよ！」

「アナタが倒したと言っていたラグナ＝ザ＝ブラッドエッジですが・・・生きてましたよ。」

「アアッ！？誰だ、ラグナⅡザⅡブラッドエッジって！」

「やれやれ・・・アナタがナルキッソス様の部下として向かった世界にいた赤いジャケットの子犬ちゃんですよ、覚えてませんか？」

「ッ！？」

ラグナを倒したと思っていたヤリドヴィツヒは、ハザマの言葉に動揺を隠せないでいる。意地が悪そうにハザマは言葉を続けた。

「あゝあ、アナタが取り逃がしたせいでこれから先きつと我々に立ちほだかるんですよ。全く・・・」

「オイちよつと待て、何でお前がその事知ってんだ！？まさか見てたわけじゃねーだろうな！？」

「そのまさかですよ。アナタ方が作戦を開始した時から全部見てました。」

「見てたなら加勢しろ！お前マジで何様だよ！」

どれだけヤリドヴィツヒが怒ってもハザマは人を小馬鹿にした態度を崩さない。加勢しろと言うヤリドヴィツヒに言葉に対して彼は冷たく言い放った。

「・・・任務外でしたから。」

「ふざけんな！クソッ、どこまでもムカつく野郎だ・・・もういい、俺は行くからな！」

怒り浸透のヤリドヴィツヒがもうこれ以上話していられなくなり
その場を去って行った。それを確かめたハザマは、誰もいない部屋
で一人呟いた。

「さて、彼等があの世界で大変な目に合っている間に、あのお方達
を出勤させておきますか・・・さぞかし楽しくなるでしょうね。ヒ
ツヒツヒ・・・」

REBEL 7 無の世界にて（後書き）

作「前書きでも言った通り、僕はマリオがとても大好き故、それを冒読するセリフを言わせるのが正直きつかったです。マリオファンの方々、本当に申し訳ありません。それと、少しの間ラグナ達は出てきませんが、どうかしばらくの間お待ち下さい。以上、作者からでした。」

登場人物と技紹介1（前書き）

- 皆さん、お待たせしました。今回はプロローグとガルディア編で出て来たキャラクター達を必殺技等も表記して載せました。とは言っても全員ではありません。あくまで目立ったキャラのみですが・

登場人物と技紹介 1

ラグナ「ザ」ブラッドエッジ

身長・・・185cm 体重・・・78kg 誕生日・・・3月3日

武器・・・ブラッドサイズ 防具・・・しんよこTシャツ、赤いジャケット

ご存じブレイブルーの主人公。この物語の主人公でもある。銀髪に赤と緑のオッドアイだが元々は金髪だった。服装は黒い服とズボン、赤いジャケットで後ろに大剣ブラッドサイズを装備している。趣味は料理で得意料理は丸焼き。お化けが苦手で人気の無い暗い夜道を怖がることもある。ぶっきらぼうで素直になれない性格だが、実際の人柄は結構良い方であり、面倒見も良い。どうでも良いがこの小説だと本編より素直だったりする。

元々彼は弟のジンと妹のサヤ、シスターの4人で教会で暮らしていたが、ユウキ「テルミ」の襲撃に会いシスターを殺され、ジンとサヤをさらわれてしまい、更に右腕もその時失った。その後、レイチエルと獣兵衛と出会い、右腕の代わりとなる『蒼の魔道書』を手に入れた。その二人とはそのころからの腐れ縁であり、獣兵衛は彼の師匠である。

本来ならトゥルーエンドのルートを辿るはずだったが、ネメシスの来襲により完全に狂い、ノエルを連れ去られ、更に異空間の果てへ飛ばされてしまうはずだったが、偶然ルツカのいる世界に辿り着き一命を取り留める。その世界でネメシスの配下と出会い、全世界の消滅を防ぐためルツカと共に戦いに身を投じる。

技名には物騒な単語が多く含まれている。

必殺技

ヘルズファング・・・高速で突進し、追加攻撃で相手を吹き飛ばす技。

インフェルノディバイダー・・・相手を空中へ打ち上げ、コンボを叩き込む対空攻撃。

ガントレットハーデス・・・小ジャンプしながら拳を振りおろす技。しゃがんでも防げない。

デッドスパイク・・・暗黒の魔獣を召喚しダメージを与える。直撃した相手はきりもみ回転して吹っ飛んで行く。現実世界ではデッドスパイク『さん』と呼ばれ親しまれている。

ベリアルエッジ・・・空中から斜め約45度の角度で奇襲をかける技。

まだ終わりにゃねえぞ・・・通称『まだお』。倒れている相手を起こし、腹パンチを繰り出す。

テラーウィング・・・この小説オリジナル技。ジンのB氷翔剣より少し遅い速度で蝙蝠型の飛び道具を放つ。当たった相手はその場に倒れ伏す。

ディストーションドライブ

超必殺技

カーネージシザー・・・超高速で突進し、暗黒の衝撃波で相手を吹き飛ばす豪快な技。

ブラッドカイン・・・蒼の魔道書の力を一時的に開放し、身体能力を向上させる。

闇に喰われる・・・右手に『蒼』の力を凝縮させ、掴んだ相手に凄まじい暗黒波動を送り込み、それと同時に生命力を大量に吸収する。ラグナの技の中でもトップレベルの強さだが、ブラッドカインを経由しなければならなかったため使用機会はあまり無い。

アストラルヒート
最終奥義

ブラック・オンスロート・・・斬り上げて相手を怯ませ、鎌に変形したブラッドサイズでメッタ切りにした後、最大レベルの暗黒波動で相手を吹き飛ばすラグナ最強の技。

ルツカIIアシュティア

身長・・・160cm 体重・・・48kg

武器・・・ウェイブショック、工具用ハンマー 防具・・・タバンメット、タバンスーツ

ラグナが最初に出会った仲間。自称才色兼備で、自分の事を天才と豪語するが、事実そう言えるだけの能力を持っている。父のタバン、母のララ、養子のキッドの4人暮らし。本当は時空を渡る機械も作れるのだが、過去の経験故一度も作ろうとは思っていない。ただし、この小説では異世界へ渡る機械を作ってしまったている。

かつてクロノ王、マール王妃等と7人で未来に復活を遂げる巨大生物『ラヴォス』を倒し、世界崩壊を未然に防いだ事がある。ただし、倒したのは復活直後の時代のため、ラグナが来た時はまだ地中深くにいるのだが・・・。そして戦いが終わり、クロノ王とマール王妃が結婚してしばらくしてキッドを見つけ、3人で育てることになった。

それから2年後のある日、ネメシスの手によってこの世界に辿り着いたラグナと出会い、ネメシス軍の存在を知ることになる。その後現れたナルキッソスの手によって、マール王妃をさらわれたため利害が一致。ラグナと共にネメシス軍の手から全世界を救う旅へ出発した。ちなみに武器がウェイブショックなのは、ミラクルショック

トはダメージが安定しないから。

ワイヤーフック以外のオリジナル技に限り、フランス語が使われている。

必殺技

火炎放射・・・一直線上に炎を発射する。あまりこの小説では出番が無い。

催眠音波・・・相手を強制的に眠らせる音波を発射する。何故か味方は平気。

ナパームボム・・・手榴弾で周囲に炎上させる。アイテムだろというツツコミは禁止。

ワイヤーフック・・・この小説オリジナル技。手首に仕込んだワイヤーを使い、相手を引き寄せたり、自分を引っ張ったり便利なワイヤー。ハザマのウロボロスとは違い、必ず何かを掴まないとダメ。

ディストーションドライブ 超必殺技

クリエ・クラテール・・・この小説オリジナル技。どう考えても飛び越せない巨大な火柱を放出させる。消すのは自由自在。名前の意味は、『火口の叫び』のフランス語である。

ドワ・エクレール・・・この小説オリジナル技。指先から炎のビームを発射し、周囲の敵を薙ぎ払う。これとクリエ・クラテールはファイガを応用したルツカのオリジナル技である。名前の意味は、『閃光の指』である。

デファンス・セルクル・・・この小説オリジナル技。全方位に防御陣を展開し、あらゆる角度からの攻撃を防ぐ。名前の意味は、『防御円』である。

ネメシス

身長・・・175cm 体重・・・60kg

この物語の黒幕。自らが存在する世界以外の消滅を企む悪の親玉。部下達からはマスターと呼ばれている。最初にノエルを連れ去り、ハザマ等他のキャラも自らの部下にした。見た目は美人でスタイルも良好だが、瞳に文字が浮かび上がっており、そこだけははっきり言ってキモい。

5人の幹部と大多数の世界から連れて来た部下に命令を出し、自分分は破滅の巫女と呼ばれる女性達の力を引き出す作業を行っているが、最初のノエルだけは自らさらって来た。その際に圧倒的な力を見せつけ、ハザマやレイチエルを一撃で倒すなど規格外である。

ヤリドヴィツヒ

ナルキツソスの部下で、マール王妃を出木杉と共にさらった男。キキキキと独特な笑い方をする。本来はマリオに倒されたはずだが、何故か復活している。異常に出世欲が強く、如何にして出世するかばかり考えている。出木杉とは何故か馬が会い、以外と素直に従う。

必殺技

一点集中・・・気合いを入れ、槍で相手を貫く技。

超必殺技

ディストーションドライブ

水蒸気爆発・・・みんなのトラウマ。周囲に水蒸気を発生させ、連続で爆発を起こし、最後に巨大な爆発でフィニッシュする。ラグナとの戦いでは目くらましにも利用した。

ミラージュアタック・・・自分自身を分身させ、戦力を増強させる。3人以上に分身することも出来るが、分身体は本体より戦闘力が低い。

アストラルヒート
最終奥義

スパイラル・スピア・・・この小説オリジナル技。凄まじいエネルギーを槍に込め、螺旋状に相手を貫く。ラグナをこの技で倒したとばかり思っていたヤリドヴィツヒは、彼の驚異的な回復力を知らずトドメを刺さずに去って行った。

出木杉英才

ヤリドヴィツヒと同じくナルキッソスの部下。子供ながら非常に頭が良く、また、銃の腕前も凄まじい。本来はのび太のクラスメイトで紳士的のはずだが、どういうわけか凶悪かつ冷酷な人格になっている。更に秘密道具をいくつか持っているが、何故彼が持っているかは現時点では不明。

必殺技

バレットストーム・・・空中から二丁拳銃で大量の銃弾をばらまく技。強力だが、必ずリロードする必要があるがでてしまう。

ディストーションドライブ
超必殺技

ジャンボガン・・・戦車を一撃で破壊するほどの銃弾を発射する秘密道具。なぜ出来杉が持っているのかは全くもって不明。ルツカのデファンス・セルクルも一撃で破壊する。

ナルキッソス

身長・・・184cm 体重・・・71kg

ネメシスの部下で5人の幹部の一人。彼を含め、5人の幹部は全員ギリシャ神話の人物の名前である。敵であつても敬語で応対し非常に礼儀正しいが、性格は冷酷で黒兵士達をただの道具としか見ていない。まだ戦う描写は見せていないが、おそらく相当強いと思われる。

登場人物と技紹介1（後書き）

作「次からいよいよキノコ王国編です。ピーチ姫がなぜさらわれてしまったのかをまずは書いてから、ラグナ達が登場する予定となっております。どうか皆さんしばらくお待ちください。」

REBEL 8 英雄と侵略者（前書き）

カグツチに突如現れたネメシスは圧倒的な強さでラグナ達を倒し、ノエルを連れ去り、更にラグナを消し飛ばしてしまう。その時、また別の世界でも危機が起ころうとしていた。

少しの間ラグナ達からスポットを外し、別の世界の同時刻の出来事をお送りします。ラグナ達の事はもう少しだけお待ちください。
REBEL 8をどうぞ！

REBEL 8 英雄と侵略者

ラグナがネメシスの手によってカグツチから消滅し、ルツカに助けられていた時、また別の世界に脅威が迫って来ていた。

ここはキノコ王国、ピーチ姫という若き姫君が治めるこの国の城の城門前で、今まさに二つの勢力がぶつかり合おうとしていた。片方は小柄で頭がキノコの形をしているこの国の兵士『キノピオ』、もう片方は黒い鎧に身を包んだ敵軍である。

しかしながら、その兵力差は圧倒的だった。キノピオ達の軍勢は300程度なのに対して、黒い兵士達は4000程であり、多くのキノピオ達が戦意を失っている。

「キノじい、一体これはどういう事なのでしょうか・・・」

「姫、出てはなりません！城の奥へお逃げ下さい！」

心配したピーチ姫がキノじいに訪ねるが、キノじいは避難するよう促した。それを見ていた大柄な敵軍の大将が一番前に出て来て彼等を罵倒した。

「オイオイ、テメー等にや先陣切って戦える奴がいねーのかよ、ザコキャラ共！」

大音量で罵倒する敵の総大将だが、キノピオ達に動きを見せる気配は無い。そもそも多勢に無勢なこの状況、迂闊に突き進んでも返

り討ちに合うだけである。

「オイ、何なんだアイツ等。クツパ軍団でもない奴が何でこの国を占拠しようと……」

「俺が知るかよ！てゆーかザコキャラって何だよ……」

「クソ……マリオさんさえ来て下されば……」

多くのキノピオ達が動揺する中、最前列にいた隊長キノピオが敵の大将に目的を聞いた。

「お前達、勝手に我が国の領土に乗り込み臨戦態勢をとっているが、まずは名を名乗れ！そしてお前達の目的は一体何だ！？」

勇敢な隊長キノピオの問いに対して、敵の総大将が不機嫌そうに答える。

「あーっ、テメー等ザコに名乗る名前なんかねーよ！それに目的も言わねーし！てゆーか言うわけねーだろザコ共！謝れ、俺に今すぐ土下座して謝れ！」

「クツ……なんて傲慢な男なんだ……。」

敵の総大将は非常に傲慢な態度で隊長キノピオ達を罵倒する。謝るのはどう考えても敵軍の方なのだが、そんなこともお構いなしに敵の総大将は黒の兵士達に命令した。

「おいテメー等、あのカスザコ共をぶっ殺せ！一匹も残すんじゃないぞー！」

そう言われると黒の兵士達がキノピオ達に向かって進撃を開始した。少数のキノピオ達は腹をくくり、戦う準備を整える。そして、戦いが始まるうとしたその時……

「ウルトラファイアー!!」

突如上空から炎の雨が降り注ぎ、黒の兵士達に直撃する。それを喰らった大多数の兵士達が炎に包まれ、やがて消滅した。

「な、何だ!? 何が起きやがった!」

敵の総大将は何が起こったのか分からず戸惑うが、すぐに炎の海にいる男を確認する。そこにいたのは赤いMのマークがある帽子をかぶり、青のオーバーオールと赤の服を着た立派なヒゲの男性であった。

「マ、マリオさん!! やはり来て下さったんですね!」

「みんな、待たせてゴメン! ルイージは何故かいなくて僕一人だけなんだけど……」

キノピオ達がマリオの姿を確認し、安堵の表情を浮かべる。マリオブラザーズの一人、マリオが現れた事により一気に彼らの士気が上昇した。そしてマリオは敵の総大将を睨み付け、何故こんな事をするのかを聞き出した。

「君達は一体どこからやって来たんだ? 明らかにこの世界の人間じゃないようだけど。それに何でこんな事をするんだ? これ以上暴れるなら本気で容赦しないよ。」

しかし、マリオの質問を無視するかのごとく敵の総大将は怒鳴り散らした。

「あーっ、ヒゲダルマが俺様に偉そうな口聞いてんじゃねーよ！不意打ちしたくらいでいい気になってんじゃねーぞクソジジイ！！」

マリオの言い分を無視しながら自分の言いたい事を主張する敵の総大将。その傲慢極まりない態度にマリオは黙ってはいなかった。

「頼むから人の質問にはちゃんと答えてくれないか。それと・・・僕は20代だ！！」

「えッ、突っ込む所そこなの！？まあいい、テメー等！あのヒゲダルマを殺っちまえ！」

20代と注意され一瞬あわてる敵の総大将だが、構わず兵士達にマリオへの攻撃命令を発した。命令を受けて兵士達がマリオに襲いかかる。しかし・・・

「ファイアナグーリ！」

マリオが手に構えたハンマーに炎を宿し、それを敵軍めがけて発射する。広範囲に広がる炎が周囲の兵士達を焼き尽くし、更に彼はハンマーを思い切り振りかぶり、近くの兵士をぶん殴る。

「ウルトラハンマー！！」

ぶん殴られた兵士は後ろの味方を巻き込み吹っ飛ばされる。瞬く間に敵軍の兵士を300近く倒したマリオは更に勢いを増し、次々

と兵士を倒していく。

「おい、テメー等！遊んでんじゃねー！！さつさとそんな奴仕留めやがれ！！！」

苛立つ敵の総大将の怒号の声を聞いた兵士達が炎の術式を展開させ、全方位からマリオに炸裂させる。だがマリオは全く動じることも無く、どこからか黄色い機械を出しそれに話しかける。

「ポンプ、あれで行く、しっかり頼むよ！」

『ハイ、任せて下サイマリオさん。』

文字通りの存在であるポンプは何故か、しかも親しげに言葉を発し、それと同時にマリオがその場を回転する。炎の術式が届く寸前、マリオがポンプのスイッチを押した。

「アクアブレード！」

ポンプから強烈な水圧の水がウォーターカッターの様に周囲にばらまかれ、炎の術式を消滅させると同時に近くにいた兵士を切り裂く。それを読んでいた後ろの敵がマリオに襲いかかるが、再び彼はその場で回転した。

「そう来ると思った、マリオトルネード！」

超高速で回転した事によりマリオの周囲に竜巻が起こり、それに巻き込まれた兵士達が吹き飛ばされる。更にその竜巻から炎が巻き起こり、広範囲に及ぶ攻撃で大半の兵士が焼き尽くされた。

「ブレイズトルネード・・・僕のとっておきの技さ。」

マリオの大活躍により敵軍の兵士は既に800程倒され、それを見た残りの兵士が攻撃を躊躇いだす。だが、敵の総大将はそれを見てイラつきだし、兵士達に命令する。

「オイ、いい加減にしろ！相手はたった一人なんだぞ！てこずってんじゃねー！！」

しかし、マリオの圧倒的な強さに敵の兵士達は誰一人として攻撃を仕掛けようとしない。それが気に入らず敵の総大将がぶん殴ろうとした矢先、後ろから別の人物の声がした。

「やれやれ・・・。そんな怒鳴る事無いじゃないですか、タンタロス様。」

呆れながらそう言い、やって来たのは緑髪でスーツを着た男性であつた。敵の総大将：タンタロスは自分に意見するこの男に怒りをぶつける。

「おいハザマ、新人のくせに俺様に意見すんじゃねーよ！何様だデメー！！」

ハザマと呼ばれたスーツ姿の男性は、上司であるタンタロスをなだめながら口を開く。

「まあまあ落ち着いて下さい。ここは一つ、私に任せて頂けないでしょうか？」

「テメーが行くってか？あのヒゲダルマをどうにか出来んのかよ！

「？」

「まあ、やるだけやってみますよ。」

そう言つてハザマは兵士達を掻き分け、マリオの正面に立ち尽くす。マリオはハザマを見て指差しながら目的を問い訪ねる。

「君はあの大男の部下なのか？まずは名を名乗ってくれ。」

マリオがそう言い、ハザマは礼儀正しく質問に答える。

「アナタがマリオさんですか。私は先日タンタロス様の部隊に配属されたハザマと申します。」

「タンタロス・・・その大男の名前だな。君達はこの世界の住人じや無いみたいだけど、一体何故こんな事をするんだ！」

マリオは何故このような事をするのかとハザマに聞くと、ハザマはその理由を話した。別世界にいるネメシスが全世界を消滅させるために破滅の巫女を集めているという事、更にその内の一人がピーチ姫であるという事を。当然マリオが黙っている筈も無く、すぐに戦闘態勢を取り直した。

「ふざけるな！お前達のその野望を達成させる訳にはいかない！お前達は僕が今ここで倒す！」

「やれやれ、こうなつてしまいますよね・・・。面倒ですがお相手して差し上げましょう！」

そう言つとハザマもまた戦闘態勢を取り出す。その瞬間、マリオ

の背筋が凍りついた。

「何だ！この異常な波動は・・・！？」

ハザマから放たれる異様な空気を察したマリオは覚悟を決める。
負けるかもしれない、しかし、負ける事は許されない。彼等の野望
をここで断つために。

REBEL 8 英雄と侵略者（後書き）

作「さあ、キノコ王国編の始まりだ！でもその前にマリオがその間
どうしていたのかを書きました。ブレイブルーのキャラもこれから
しっかりと出していきますのでよろしくお願いします。」

マリオ（以下マ）「何だかあのハザマって人めっちゃ怖いんだけど
！」

作「まあ奴はブレイブルーでもラスボス格だからね。」

マ「何で戦わせるのよ、僕どうなるの!？」

作「まあ、頑張れ・・・」

マ「オイッ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3963v/>

BLAZBLUE World Travelers

2011年11月21日06時50分発行